
天使の来ない夜 (RIKU・5)

北川ライム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使の来ない夜（RIKU・5）

【Nコード】

N6118T

【作者名】

北川ライム

【あらすじ】

グルメ雑誌のライターとして、アジアを巡る長期海外取材に出かけた玉城。

しかし彼は、靈感がケタ外れに強くなってしまったリクの事を気遣い、それとなく様子を伺うよう長谷川や多恵に頼んでいた。

巷では深夜になると現れる通り魔が、3面記事やローカルニュースを賑わせていた。

けれども当のリクの周辺は至って平穏に見え、気を張っていた長谷川も緊張の糸を緩める。

ファンだと言ってリクの絵を買い占め、リクに色目を使う美術商の社長に、少々苛立つ程度の日々だった。

けれど、通り魔による最初の死者が出るころ、ボンヤリとリクの周りにおぼろげな暗雲が立ちこめ始めた。

なかなか姿を現さない漠然とした不安は、リクの心身を次第に憔悴させてゆく。

リクが何に神経を磨り減らせているのか分からないまま、長谷川はただ、リクを想い、寄り添おうとする。

濃い霧に包まれた先の闇。その正体は何か。

執拗にリクに纏わりついてくる『男』がリクに見せたレンブラントの複製画には、どんなメッセージが隠されていたのか。

RIKU第5弾（番外入れて6作目）、全24話でお届け致します。

第1話 残酷な蜜

『ねえ君、このアザ、どうしたんだい？』

夏の夕暮れ。

人気のない寂しい公園で男は、ブランコに座ったままボンヤリ宙を見つめている幼い少年に近づき、

その横にしゃがみ込んだ。

ヨレヨレになって伸びた少年のＴシャツの襟ぐりから、赤黒いアザが覗いている。

『何もしないから、ちよつと見せて』

男は少年を怖がらせないように優しく声をかけると、そのシャツをめくった。

外からは分からない場所に、いくつも痛々しいアザが出来ている。

ズボンの裾をめくると、やはり無数に小さな傷があった。

絆創膏を貼るでもなく、血を滲ませて固まっている。

『これ、おうちでやられたの？』

そう男が訊くと、少年は咄嗟に首を横に振った。

『君のお父さんがやったんだろ？ お母さんは庇ってもくれなかったんだね』

もう一度男が辛抱強く訊くと、少年は瞳を揺らし一瞬困惑した表情をしたが、今度は何かに怯えるように唇をキュッと結び、さつきよりも更に激しく首を振った。

『かわいそうに。羽白が言ったとおりだ。何て酷い・・・』

男は全てを了解したようにそう呟くと、少年が握ったブランコの鎖と一緒に、その小さな体をギュッと抱きしめた。

じっとしている少年の頭をなで、今度は少年の柔らかな頬に自分の

頬を寄せた。

まだ小学校低学年と思われる華奢な体をしばらく抱きしめた後、男はゆっくり体を離して少年の黒々とした瞳を見つめた。

『君を助けてあげるよ。でも、まずは君を酷い目に会わせてる大人に罰を与えよう。これからちょっとしたゲームをするから。君は怖がらずに、俺の側にいればいいからね』

男は少年の頬をなで、頭をなで、優しく微笑んだ。

少年はボンヤリした目で男を見つめた。

頬に触れた手がとても優しく、サラリとして心地よかった。

心の奥底で固まっていた氷が溶け出して、体に染みこんでゆくような、甘い感覚があった。

もう長いこと、誰にもそんなに優しく触れた事はなかった。

優しく話しかけられることもなかった。

何かのご褒美なのだろうか。

少年は目を閉じ、無意識にその男の手に、自らの頬を寄せた。

『大丈夫。心配しなくていい。きっと全部、うまく行くから』
その声と共に、少年は再びその腕にふわりと抱きしめられた。

第2話 玉城からの贈り物

大東和出版のラウンジは、初秋のカラリとした木漏れ日を窓から取り入れ、心地よい明るさを保っていた。

様々なデザインの椅子とテーブルが並び、ゆったりとしたその空間は、打ち合わせや休憩、歓談の場として自由に使える。

社員からの評判も良く、長谷川や多恵も気に入ってよく利用していた。

午前10時。

先に来て横並びに座っていた長谷川と多恵は、後から入ってきたリクに手招きした。

いつもの事ではあるが、ラウンジ内で休憩や打ち合わせをしている社員は男女問わず、必ずこの青年に一瞬目を奪われる。

今日もTシャツにジーンズ、黒のカジュアルなジャケット。

いつものように飾り気のない服装だったが、そのしなやかに伸びた肢体と柔らかな動き、神聖さを感じさせる中性的な整った顔立ちは、その場を心地良い緊張で満たした。

『きつとウチが抱えているどのモデルも勝負にならないほど綺麗な男ですよ』と、ファッション誌の編集長に言わせるほど、リクの容姿は人を惹きつける。

みんなの反応を見て、多恵が、なぜか自分の所有物を自慢するかのよう「ふふ」と笑うのも、いつものことだった。

「あんたさ、ちゃんとご飯食べてる？」

自分たちの正面の椅子に座ったリクに、開口一番、長谷川が訊いた。リクがキョトンとして長谷川を見る。

「なんで？」

「また痩せた。それに少し顔が青白い」

リクが返答に困っていると、長谷川の隣で多恵がニンマリした。

「やだ、長谷川さん、なんかお母さんみたい」

「何でお母さんよ!」

長谷川が多恵を間近で睨んだが、この新入社員は全く動じる様子もない。

悪びれもせずに長谷川に笑い返し、今度はリクの方に身を乗り出した。

「だけど、私もちょっと心配だな。やっぱり、あれから眠れないんじゃないですか? リクさん」

「・・・」

リクも長谷川も黙り込んだ。

春先の吉野宮神社での殺人事件がきっかけで強まってしまったリクの特異能力が、リク自身を苦しめていることは、二人とも玉城から聞いて知っていた。

けれどこればかりは、長谷川にもどうすることもできない。
そのことが長谷川には齒がゆかった。

「心配いらないよ。ちゃんとやってる」

いつものように素っ気なく、感情を込めずにリクは答えた。

“あまり自分に構わないでほしい” というリクの信号なのだ。

ずいぶん棘が取れて人間らしくなってきたが、リクのこういう可愛げのない部分が、長谷川は気に入らなかった。

知らず知らず、声が邪険になる。

「じゃあ、今度会う時までにもう少し太ったときな」

「今度って? 何の用事の時だよ。今日だってそっちが勝手に呼び出したくせに」

「迷惑だったらその場で断りなよ」

「まあ、まあ、二人とも」

険悪になりかけているところを、面白そうに多恵がなだめた。

「玉城先輩がいないと、なんで喧嘩になるんでしょうね、二人とも」
そう言いながら、やはり多恵はニコニコしている。

とにかく二人が揉めるのが楽しいらしい。

「で？ 今日は何の呼び出し？ 玉ちゃんはずっと出張だろ？」

リクがそう訊くと、多恵がテーブルの上に大きめの茶封筒を置いた。

「はい、これ」

「何？」

「玉城先輩がリクさん呼び出して、手渡すようにって」

「玉ちゃんが？」

リクはテーブルの上の、パンパンに膨らんだB5サイズの茶封筒に目をやった。

玉城は現在『グルメディア』の「旅」をテーマにした長期取材で、沖縄を皮切りに、ベトナム、タイ、マレーシア等、アジア各地をまわっている。

スタッフの慰安旅行も兼ねていると言うことで、ちゃっかりそれに混ざり、2カ月は帰らないと言う。

「僕宛に郵送すればいいのに」

困惑しながらそう言い、茶封筒を手にするリクに、長谷川が苦笑しながらつぶやいた。

「あんたを呼び出して、生存確認してくれってさ」

リクが眉をひそめる。

「なんだよそれ」

「ねえ、何を送って来たのかな、先輩。沖縄の消印だけど」

多恵に煽られ、面倒くさそうにガムテープを剥がし、封筒を覗き込んだリクが絶句した。

そのままリクは、封筒の中身をテーブルの上にガサツとひっくり返す。

テーブルの上は、西日本各地のありとあらゆるお守りや、お札で溢れ返った。

《リクにやるよ。どれか効くかも知れないだろ？ - - 玉城 - - 》

メモ用紙に殴り書きした玉城のメッセージが、最後にひらりとテーブルに舞い落ちた。

第3話 エロス

「あいつは本当の馬鹿なのか？」

長谷川が呆れた声を出しながら、玉城が送ってきた色とりどりのお守りを指先でつまみあげ、

「家内安全っていうのもあるよ」、と情けない顔をした。

「長谷川さん、分からないかなあ。玉城先輩の不器用な愛が。取材の合間をぬって、いろんな所で集めてきたんですよ。感動しちゃうなあ。ねえ、リクさん？」

多恵が同意を求めてきたが、リクは何と言ったらいいか分からない様子で、ただそのお守りの山を見つめていた。

「まあ、確かにあいつの優しさは伝わるね」

長谷川はテーブルの上に広がったお守りやお札をかき集め、再び茶封筒に入れると、リクの方に差し出した。

「要らないだろうけど、持って帰ってやって」

長谷川の身も蓋もない言い方に、リクはやっと少し笑った。

「うん。ありがとう。・・・じゃあ、僕はこれで」

「あ、待って待って、リクさん」

早々に立ち上がったリクを、多恵が甘えた声で引き止めた。

「もうちょつといいじゃないですか。ねえ、これ見てください。ジヤーン！グリッド最新号」

効果音入りで多恵は、グリッドvol.39をテーブルの中央に乗せた。

表紙はクリムトの「接吻」だ。多恵は意気揚々としやべり出した。

「初めて私の編集後記が載ったんですよ。まあ50文字ですけどね。

でも名前が載るってなんだか感動しちゃう。リクさんの自宅にも送ったんだけど、きつと見てないでしょ？　ちよつと見ていきませんか？　今回はエロス特集なんですよ」

「ちがう！」

絶妙のタイミングで長谷川が突っ込んだ。

「17世紀から19世紀、バロック美術から近代美術までにおける美の探求がテーマだよ。何回も言ってる。あんたが『エロス特集、エロス特集』って言うから、編集部のみんなが面白がってそう呼ぶんだろうが」

「いいじゃないですか、長谷川さん。バロック美術、新古典主義派は特に、人物画、宗教画に至るまで、その魅力はズバリエロスです。官能です」

「肌の露出度で決めてない？」

「色気です」

少しもひるまず多恵は長谷川を正面からじつと見た。

「ねえ、リクさんもそう思うでしょ？」

急にクルリと笑顔で振り向いてきた多恵に、リクはキョトンとした。その反応に満足して多恵がニンマリと笑う。

「表紙はクリムトよりカラバツジョがいいって言ったのに、却下されちゃいました。カラバツジョ好きなんだけどなあ。あの徹底した写実性と劇的な明暗対比、ドラマチックな構成の中に甘美で隠微な官能があるんですよー」

「どこのエロビデオ評論家だよ多恵ちゃん。表紙はインパクトありすぎても品位を落としてダメなんだよ」

「あら〜？　34号でリクさんの写真、表紙にたくせに長谷川さん。あんな強烈なインパクトは無いでしょ」

「あれは最高だったでしょ」

そう言って長谷川はニヤリとした。

“どうでもいいよ”とばかりにリクは、椅子の背もたれに沈み込ん

だ。

帰るタイミングを逃したらしい。

「レンブラント、クリムト、ブーシェ、モロー、そしてブグロー」
多恵がパラパラとページをめくりながら歌うように言う。

「ブグロー、最高ですよ。何でしょうね、あの気恥ずかしくなるような感覚。キスされる幼児にさえ漂う恍惚。透明な青っぽい官能」
「あああ、もういいよ。多恵ちゃんの話聞いてたら、すべて通俗的に聞こえるよ。あんたは飲み屋のエロじじいか」

「やだ、長谷川さんったら」

「あの・・・」

たまらずにリクが口を挟んだ。振り向く多恵と長谷川。
「もう帰っていいかな」

無表情で言うリクに、長谷川は苦笑いを返した。

「うん、悪かったね、引き留めて。佐伯さんの画廊に寄ってから帰るんでしょ？ 時間が空き次第、私も顔出すって言うといいてよ。相談もあるし」

長谷川がそう言うと、リクは小さく頷いて席を立った。

玉城が居るときのように、会話がうまく進まないな。
なんとなく長谷川はそう思った。

その事が、モヤモヤとした不快な焦りを生み出す。

玉城という翻訳機がないと、この青年とは言葉がうまく通じないのかもしれないと。

「おお、ついにかあ・・・いつか被害者出ると思ってたんだよ」
席を離れようとしたリクのすぐ側で、別の編集部の男性社員がつぶやいた。

彼を始めとする数人が、ラウンジの壁に据え付けてある液晶TVを食い入るように見ている。

長谷川と多恵、そしてリクも一瞬画面に目をやった。

画面には大きく、

『連日出没する通り魔。ついに一人目の死者か』と、白抜きの文字が浮かんでいた。

第4話 通り魔

ラウンジのTV画面に映し出されたのは、数週間前から大東和出版本社がある地区を中心に起こっていた、通り魔事件の続報だった。深夜に突然通行人が無差別に鈍器で殴られ、鋭利な刃物で衣服を斬りつけられるという不可解な事件だった。特に金品を奪われる訳でもなく、ただそのスリルと報道を楽しんでいるような狂乱を感じさせる。

昨日までに4人の軽傷者が出たが、いずれも犯人は被害者がひるんだすきに逃亡している事から目撃情報も曖昧で、手がかりもつかめぬままだった。

警察は通常の夜警の強化ぐらいしか手を打たず、今回ついに死者が出たことについて、レポーターは警察の判断の甘さを遠まわしに指摘していた。

今回死亡した被害者は所持品が無かったため、現在まだ身元不明の40歳半ばの男性。

警察では一連の通り魔との関連は確定していないが、その線が濃厚だとして捜査にあたる旨を伝えた。

「そりゃあ、通り魔の犯行に決まってますよね。殴って、顔見られて、思わずグサリですよ」

あからさまな多恵の表現に、長谷川は食傷気味な目を向けた。

「え？　そう思うでしょ？　長谷川さんも。早く捕まえないと、またやらかしますよ、こんな奴は。長谷川さんも、夜道は気をつけてくださいね」

「思ってもないでしょ」

「ばれました？　長谷川さん襲ったら、犯人その場で半殺しの刑ですもんね」

軽口をたたく多恵の前を、興味なさそうにリクが横切って退席しようとした。

「あ、リク」

長谷川が呼び止める。

「携帯の電源、ちゃんと入れときなさいよ、いつも」

リクは一瞬面倒くさそうに目を泳がせたが、もう一度長谷川に視線をもどし、ちいさく「うん」と言うと、ラウンジを出ていった。

「・・・むかつく」

長谷川はポロリと漏らした。

「少しは棘が取れたと思ったのに、また野生化してきたんじゃないか？ あいつは。玉城がいないとダメなのかね」

「ああ見えて、玉城先輩は猛獣使いですからね。リクさんだって、長谷川さんだって、なんでも来いですよ」

本人を目の前に恐ろしいことをケロリと言い放ち、それでも多恵はグリッドをめくりながらニコニコしている。

お前だって猛獣だ、と腹の底で思いながら、長谷川は多恵をじっとり睨んだ。

「ねえ、長谷川さん、気が付きました？ リクさんの手首」

「え？ 手首？」

いきなり方向転換した多恵の言葉に長谷川がキョトンとする。

「左手首に包帯してたでしょ。気がつかなかったんですか？」

「・・・そうなの？」

「隠すようにしてましたからね。どうしたのかとも、訊けなかったですけど」

「・・・ふーん」

長谷川は気の抜けた返事をしたものの、しばし口をつぐんだ。

「でも、心配いらないですよ。ねちっこい悪霊の気配とかも感じなかったし。安眠できてない感じはするけど、元気そうだったし。きつと捻挫でもしたんでしょ」

多恵はそう言うとき再びニコリとして立ち上がり、

「長谷川さん、そろそろ打ち合わせの時間ですよ。行きましょ、」
と、長谷川を急かせた。

「うん、・・・そうだね」

長谷川は手に持った自分の携帯をぼんやり見つめ、何かモヤモヤとした暗雲を腹の中を感じながら、上の空でそう返した。

第5話 画廊にて

路面電車を降り、西欧をイメージした煉瓦の舗道を少し歩いた所に、オーナー佐伯の経営する画廊、『無門館』はあった。リクの絵を独占的に扱っている画廊だ。

同時に若い才能の発掘場所でもあり、長谷川の受け持つ『グリッド』の奥の手として、よくここから出た若い画家が取りあげられた。

『大東和出版に来られることがあつたら、是非こちらにも顔を出してくださいね』

と、佐伯は事あることにリクに言う。

絵の搬入も最近では専門の業者に委託することが多くなり、佐伯と顔を合わすことも、月に一回あればいい方だ。

人と会うのは苦手なりクだが、佐伯には以前個展で世話になったこともあり、なるべく彼の誘いや注文には応えようと思っていた。

「あ、リクさん。ちょうど良いところにいらっしゃいました」

画廊の自動ドアを抜けると、いきなり佐伯の通りの良い声が聞こえてきた。

丁寧な物言いと、骨張って彫りの深い顔立ち。

『佐伯さんって英国貴族に仕える執事さんみたい』と言った多恵の言葉を、リクは佐伯を見るたびに思い出してしまつた。

「今ちょうど、秋山さんがいらっしゃってるんですよ。ほら、いつもリクさんの絵をお買いあげ下さっている方です」

佐伯が手で示す方を見ると、そこには、一目でオーダーメイドと分かる仕立てのいいダークブラウンのスーツを身につけた、背の高い男がこちらを見ていた。

少し色気を含んだ、気だるげな視線だ。

リクがゆっくり歩み寄りながら小さく会釈すると、秋山は思いがけず、満面の笑みを浮かべた。

肩幅は広いが、無駄な贅肉のなさそうな引き締まった体。

大きな二重の目は優しく、それでいて相手の内面を見透かしてしまふような熱を帯び、じっと見つめられると気恥ずかしささえ感じてくる。

「いやあ、いつかお会いしたいと思ってました。本当にうれしいですよ、ミサキさん」

声は落ち着いているが、年齢は自分と一回りも違わないだろうと思っただ。

長谷川より少し上くらいだろうか、と。

「こちらこそ」

リクが微笑み返すと、秋山は自然な流れでスッと右手を差し出してきた。

握手という行為になれていないリクは戸惑ったが、少しぎこちなくその手を握ると、秋山はぐっと力強くリクの手を握り返してきた。そしてそのままじっと、リクの目を無言で見つめてくる。

リクは何か、心の奥でザワリとするものを感じ、失礼にならない程度に体を退き、その手から逃れた。

「なるほどね」

秋山はリクに笑いかけた後、ふっと体をひねり、一点だけ展示してあったリクの8号の絵に向き直った。

「こんな繊細な絵を描くのはどんな手だろうと思ってました。思った通り、しなやかで美しい手だ」

“川辺の夜の闇を、朝の清潔な光が溶かしてゆく肅々としたひとときを描き出したこの絵は、夢から覚める動植物の息づかいを閉じこ

めた、現実と非現実、静の動の混沌を思わせる。”

それは佐伯が初めてその絵を見たとき、リクに言った感想だ。

リクはそこまで深い意図を込めて絵を描いたことはないが、気に入ってもらえるのは嬉しかった。

秋山がじつと見つめているのは、その絵だ。

「本当のところ、もうしばらくこの絵はここに置いておきたかったですけどね。さっそく秋山さんに落とされてしまいました」

佐伯は残念そうに笑った。

リクは少し戸惑うように秋山を見、そして礼を言った。

けれど未だに自分の作品に値が付けられ、買われていくと言うことに気恥ずかしさを感じているリクは、正直なところ“得意の客”の前にこういう態度を取っていいか良く分からなかった。

「私が御礼を言わなければ。私はミサキさんの新作を見るたびに初恋の人と出会ったような甘いときめきを感じるんですから」

「・・・」

リクが居心地悪そうに視線を泳がせ、佐伯を見る。

佐伯は面と向かって褒められるのが苦手なリクの心中を察したように、口を開いた。

「秋山さんはグリッドのリクさんの特集を見て、リクさんのファンになられたそうですよ。それ以来ここのお得意さまでです。この若さで美術商を経営されてるだけあって、美には確かな目をお持ちですよ」

それとなく双方を褒める形を取りながら、佐伯はやんわりと話題を変えた。

「グリッドを？」

「そうですね。あの特集は素晴らしかった。お陰であなたと出会えました」

秋山はそう言々とチラリと腕時計を見た。

「せっかく会えたことだし、ゆっくりお茶でも・・・と思ったんですが、残念ながらこれから商談で。また近いうちにお会いできますか？ 出来れば一度、あなたのアトリエに行ってみたい。絵を描くあなたを見てみたいと思ってるんです」

「それはちよつと無理な相談ですね」

リクが口を開くよりも早く、後方から怒気を含んだ太い声が飛んできた。

3人が振り向くと、エントランスからゆっくり歩いてくる長谷川の姿があった。

リクは少しホツとしたように小さく息を吐いた。

第6話 わがまま

「リクのプライベートな場所を教えるわけにはいきません」

表情は穏やかだったが、秋山に投げつけた長谷川の声は剣呑だった。秋山は、突然現れたこの大女の説明を求めるように、佐伯を見た。

「グリッドの編集長の長谷川さんです」

佐伯がそう言っていると、秋山はクルリと表情を一変させ、そののない笑みを浮かべた。

「ああ、あなたがグリッドの？ あの美術誌は素晴らしい。毎号見させてもらっていますよ」

「それはどうも、ありがとうございます」

儀礼的にそう返すと、長谷川はリクのほうを向いた。

「営業車を借りてあるんだ。ついだから送ってあげるよ。さ、行こう」

「いいよ、別に。今来たところだし、佐伯さんともちゃんと話をしなない」

けれど長谷川はそれを無視し、佐伯と秋山の方に向き直った。

「ちよつとリク、病み上がりなもので、今日は失礼させてもらいますよ。佐伯さん、また明日にでも顔出しますので」

佐伯が少しばかり眉を上下に動かし、「了解しました」と答えると、長谷川はすぐさまリクの手をつかんで引っ張った。

リクも渋々といった形で従う。

長谷川の不機嫌の訳は分からないが、こういう時は逆らわない方がいいことを、リクも知っていた。

面倒くさいのだ。

「あ、待って下さい」

秋山の声が、強引に長谷川とリクの足を止めた。

秋山は素早く自分の名刺を取り出し、その裏に万年筆で何かを書き込んだ後、リクに歩み寄るとそのジャケットのポケットに落とし込んだ。

「また近いうちにお会いしましょう。ミサキ・リクさん」

最期にそう言っただけで覗きこんできた秋山の目は、なぜか少しも笑っていなかった。

ほんの少し胸にザワリとしたものを感じたが、リクは小さく頭を下げ、早く来いとばかりにこちらを睨んでいる長谷川の後を追った。

「病み上がりなんかじゃないけど」

長谷川の運転する営業車の助手席に沈み込みながら、リクが不満げに言った。

「じゃあ、あのままあの男に、次に会う約束させられたり、家の住所訊かれたりしたかった？　あの男がどんな目であんたを見てたのか、気が付かなかったの？」

「客は大事にしろって言っただけに」

「ああいう成金は金で芸術も芸術家もすべて買い取れると思ってるんだ。あんたの絵は、あいつに買い占められる為の物じゃないよ」

リクが長谷川の言葉を聞きながら、横で笑った。

「分かんないな。誰が買ってくれるかなんて、僕にはどうでもいいんだけど」

「私はどうでも良くない」

長谷川はきっぱりと言った。

言わずにいらなかった。

そうしないと、腹の中にたまった鬱憤が、どこかで爆発しそうだった。

それは秋山に対してなのか、それとも、自分の保身に無頓着なこの青年に対してなのかは判然としない。

「長谷川さんて、いつ僕のマネージャーになったの？」
リクが、前を向いたまま冷たく言った。

確かにリクへの干渉が行き過ぎていないとは言えない。

けれどそんな一言が、どれ程相手を凹ませるか、この青年はきっと一生気付かないのだ。

いや、気付いたとしても、気にもならないのだ。

長谷川はなんとも言えない空しさを感じ、その空しさの原因が分からぬ事がまた腹立たしく、つい乱暴にハンドルを切った。

年期の入った営業車は、甲高くタイヤをきしませながら、リクの家へと続く国道に入って行った。

商業ビルがまばらになり、大きめの国立公園を越えたあたりで、区切られたように住宅地が変わる。

長谷川が助手席にチラリと視線を送ると、リクは黙ったまま、窓の外を見ている。

不機嫌なのか、そうでないのか分からない時の沈黙は、どうにも居心地が悪い。

長谷川はカーラジオのスイッチを入れた。

少しばかりの雑音と一緒に、少し前に公開された邦画の主題歌が流れてきた。

切なくて柔らかい、長谷川の好きな曲だ。

なんとなく、このミュージシャンの歌はどれも、リクに合う。

そんなことが、何の脈絡もなく長谷川のなかに浮かんた。

リクの家が近づくにつれ、山々も近づき、景色に心地よい緑が目立つようになる。

雲一つ無い、気持ちのいい小春日和だった。

少し陽射しが眩しかったのか、リクが左手を上げ、目の上にかざした。

そのジャケットの下から件の白い包帯がチラリとのぞき、長谷川の視線に飛び込んできた。

「手、どうしたの？」

長谷川が前を向いたままさり気なく訊くと、リクはつまらなさそうに「捻挫」とだけ答えた。

「そう」

長谷川がそう答えると、ぷつりと会話は途絶えてしまった。

なんと味気ない答え。

けれど、実のところ長谷川はそこそこ満足だった。

当初の目的は達成された。

電話するほどの事でもないが、きつと訊かなかったらずっと胸の中でくすぶってしまっただろう質問。

この青年の一言ひと言に一喜一憂する自分が腹立たしかったが、とりあえずは胃の中の不快感が消えた事に、長谷川は安堵の息を漏らした。

『・・・では午後のニュースです。帰宅途中の会社員、久留須道夫くろす・みちおさん46歳を刺した犯人の足取りは依然つかめず、捜査は困難を極めている模様です。久留須さんはこの日夜勤を終えたあと・・・

』

若いキャスターが、例の殺人事件の続報を伝えていた。

朝のニュースの後すぐに、被害者の身元が判明したらしい。

会社の近辺で起こった事件であり、犯人の目星も立っていない事が不気味で、背筋が寒くなる。

編集部の若い子にはあまり遅い時間に退社しないように、長谷川も注意を促していた。

「^{クルス}十字架も結局、殺人鬼には効果なかったんだね」

長谷川はぼんやりと、そんな少々不謹慎な冗談を言ってみたが、隣に座っているはずの青年から返事は返って来なかった。

見ると、リクはポカポカした陽気に眠気を誘われたのか、気持ちよさそうに目を閉じていた。

日にも焼けず、相変わらず透けるように青白い頬に、まぶたに、車窓から落ちる光が静謐な陰影をつくりだしている。

「・・・寝ちゃったか」

長谷川は車の速度をギリギリまで落とすと、努めて視線をフロントガラスに向け、何となく口元が緩む自分に戸惑いながら、プチリとラジオのスイッチをオフにした。

第7話 違和感

少年は、ものめずらしそうに、きよろきよろと部屋の中を眺め回した。

公園で出会った若い男に連れてこられたのは、外からは誰も住んで居なさそうに見える、朽ちかけたあばら屋だった。

『ここは俺たちのアジト。隠れ家なんだ』

男はいたずらっぽく声をひそめ、少年に目配せした。

『俺さ、最初はこんな計画降りようと思ったんだ。身代金誘拐だなんて、どう考えても極悪非道だろ？ 羽白たちは君の親に個人的に恨みを持つてるらしいけど、俺は関係ないし。最初は馬鹿な事はやめろって止めようと思った。でもね、君を見て考えが変わったんだ』

男はいつも少年の目線まで腰を落として、優しく話しかけてくる。

見知らぬ部屋、見知らぬ大人。

けれど、その男が手渡してくれたミルクココアは甘く温かく、少年の緊張と冷えた心をトロトロと溶かしてくれた。

何よりも、あの両親の元へ今夜は帰らなくていいのだと思うと、その柔らかな甘さと共に、心身が震えるように歓喜した。

少しも不安はなかった。目の前の若い男の手は、自分を救う神の手だ。

不安があるとすれば、その『ゲーム』が終わった後に、自分が用済みになり、元の世界へ帰されるのではないか、という事だけだった。

男は、後から部屋に入ってきたもう一人の男を指さしながら言った。『ほら、この、あごに大きなアザのあるお兄ちゃんが羽白^{はしろう}。無愛想でおっかないけど、綺麗な名前だろ？ そして俺が幸田。もう一人のお兄ちゃんは、帰ってきたら紹介するよ。みんな、君の仲間だからね』

羽白と紹介された男は目つきが鋭く、少年を不安にさせたが、少年は幸田が言った“仲間”という言葉にすっかり心酔した。

さつきまで、自分はひとりぼっちだと思っていた少年にとって、それは魔法の言葉に思えた。

愛してくれるべき『親』という生き物は、外でのイライラをすべて少年に向け、外に分からないように少年を痛めつけた。

父親は4年も前に新しい人とチェンジされ、そして自分を産んだはずの母親も、その父と過ごすようになって、悪魔になった。

自分を愛してくれる人はいない。ひとりぼっちなのだと思っていた。

けれど、幸田はそうじゃないと言ってくれたのだ。

少年に温かい食事をとらせ、傷がしみないように体を洗ってくれ、柔らかいベッドで少年が眠るまで髪をなでくれた。

自分が人間なのだと、その夜初めて少年は実感した。

嬉しくて幸田の胸に身を寄せると、幸田はその腕でギュッと少年を包み込んでくれた。

その匂いに、息づかいに、甘い安堵が押し寄せて腹の辺りが震える。もしかしたら、このままずっと、この腕に守られながら暮らせるのかもしれない。

そう信じてみてもいいのかもしれない。

その頬に優しいキスが落とされる頃には、少年は幸せに満ち、心地よい深い眠りに落ちていた。

自宅に帰り着いたリクは、以前のこの家の住人が作ったという木製

の重厚なテーブルに、紙袋をトンと置いた。

『ほら起きろ！ 着いたよ！』と、長谷川に少し乱暴に揺すられて起こされた時、自分がどこにいるのか一瞬分からなかった。それほど熟睡していたのだろう。

あの後、長谷川に礼を言っただろうか。

そんなことももう覚えなほど、ぼーっとしていた。

夜にちゃんと眠れてないせいだと自分でもよく分かっていたが、たぶんそれは不治の病と同じなのだ。

藻掻いて焦ればそれだけ心が弱り、不安になって、絡め取られる。

大丈夫。なんとかなる。一人でも。

リクは一つ深呼吸すると、紙袋に収まった茶封筒を取り出した。

椅子に腰掛け、その封筒を覗き込む。

まだビニールに入ったままの赤、朱、紫、白、黄色のお守りや紙製のお札がぎっしり詰まっている。

辺鄙な所にある神社やお寺の長い階段を登って集めたのだろうか。宗教も宗派も混ぜこぜだが、玉城にとってそんなことは関係ないのだろう。

『なあ、リク。これだけあれば、どれか効くかもしれないだろ？』

そんな玉城の声が聞こえた気がして、自然とリクの口元に笑みがこぼれる。

そういう物に“救い”を感じたことは無かったが、その色とりどりの小物の向こうに、一本気で熱いあの友人の顔が浮かんでくる。

不思議と心臓の辺りが温かくなり、気持ちが落ち着いていた。

今なら少し、眠れるだろうか。

そう思いながら脱いだジャケットのポケットに、微かな異物感があった。

手を入れるまで忘れていたが、あの秋山という男の名刺だ。

長谷川はあの男が気に入らないようだが、リク自身は特に何も感じなかった。

また会いたいとか、この家に来たいというのは少々面倒くさかったが。

社名と肩書きと秋山の名が書かれたシンプルな名刺を何気なく見つめ、それを裏返した時、リクの動きが止まった。

一瞬感じたのは“違和感”だった。

そこには《 また会ってくれるね、岬 璃久くん 》と、流れるような書体で書いてあった。

公でもプライベートでもリクは、可能な限り本名の漢字は使わなかった。

グリッドの記事にも「ミサキ・リク」としか表記させていない。

自宅に届く郵便物も、ほとんどがカタカナ表記だ。

もちろん金融機関、事務処理等の関係書類は別だが、そんなもの、秋山が知るはずはない。

最初の違和感はそれだった。

そして次の違和感は、その下に書かれた、「1995・11・07
」、という年月日だ。

リクはしばらくじっとその数字を見つめた後、ポケットから携帯を取り出し、その名刺に書かれている番号を押した。

秋山は5コール目で電話に出たが、その声は、先程とは別人のように疲れ切っていて気だるかった。

「お仕事中でしたらごめんなさい。ミサキです」
息を呑むような間があった。

「ああ、・・・リクくん。かけてきてくれて嬉しいよ。すごく嬉しい」

相手がリクだと分かると途端にその声は華やいだ。

“ミサキさん”という呼び名は、いつの間にか“リクくん”に変わっている。

昔の友人から電話をもらったかのように、秋山の声は親しげだった。

「会ってお話したいのですが」

「うん、もちろんいいよ。僕も君と話がしたい。明日の午後からなら時間が取れるはずだ。君の家に行ってもいいかい？」

弾むように秋山は言った。

リクはしばらく考えるように黙っていたが、やがて決心したように携帯を強くつかんで応えた。

「いいですよ。・・・あなたがなぜ、1995年11月7日の日付けを名刺の裏に書いたのか、僕に聞かせてくれるのなら」

第8話 キズ

秋山がリクの家を訪れたのは、翌日の午後3時を回った頃だった。自家用車で乗り付けた秋山は、昨日と同じように仕立ての良いスーツに身を包んでいた。

リクの家と、それを取りまく自然の美しさを一通り褒めると、ぱたりと喋るのをやめ、突っ立ったまま、ただ嬉しそうにリクの顔をじっと見つめた。

「お茶を煎れますから、座ってください」

困ったようにリクがそう言っても、秋山はその表情を崩さない。

「何も要らないから、ここに居てくれないか？ 君とこうやって話が出来ることがすごく嬉しいんだ。それに、君も俺に話があるんだろう？ さあ、おいでよ」

秋山は誘うような柔らかい笑みを浮かべたまま、ゆっくり木製の椅子に腰を下ろした。

リクはキッチンに行きかけた足を止め、決意したように秋山を見つめると、自分もその正面の椅子に座った。

「1995年、11月7日。あの日付を名刺の裏に書いた訳を教えてください」

落ち着いた声でそう言うリクの目を間近で見つめながら、秋山はさつきまでとは別の笑みを浮かべた。

「ああ、あれね。卑怯だとは思ってたんだけど、俺を印象づけるためには、あれを書くのが一番だとおもったからね。どう？ 成功したる？ 君は居ても立っても居られなくなり、俺をここに招待してくれた」

「何か知ってるんですか？」

「何か知ってるかだつて？ 俺が？」

秋山は楽しそうに言うテーブルに身を乗り出し、リクに近づいた。

「俺が知ってるのは、君の背中に醜い火傷の痕があることと、君が愛されずに育ったことくらいだよ」

「・・・どういう事ですか」

リクが鋭い視線を秋山に向けた。

秋山は笑みを少し曇らせ、悲しそうな表情を作って見せた。

「ごめんね、意味深な日付を書いて。君は俺があ的事件の真相を知ってるかもしれないと思つて、ここへ呼んだんだろう？ でも残念ながら、俺は報道や週刊誌で君の名と事件を知っただけでさ。真相なんてこれっぽっちも知らない。・・・誰が10歳の君の背を斬りつけ、火をつけて焼き殺そうとしたか・・・なんてね」

リクは期待が外れたことと、だんだんと豹変してゆく秋山の顔つきに、呼吸が苦しくなるほどの戸惑いを感じた。

秋山はじつとリクを眺めながら目を細めて嗤った。

それはどこか常軌を逸した恍惚さえ感じさせる。

「やっと会えたね、岬璃久くん。ずっと会いたいと思っていたんだ。15年間ずっと。週刊誌に君の写真が載ってたのを知ってるかい？」

まだ喉元まで包帯をした痛々しい10歳の君が。

目をほんの少し隠してあったけど、何て綺麗な子なんだと思つて見てたんだ。犯人も捕まらず、次第に報道もされなくなってガツカリしてたんだけど、1年前のグリッドを見て息が止まるほど驚いたよ。ああ、ここにいた、つてね」

そこまで黙って聞いていたリクは、不快感を胸の底に沈めながら口を開いた。

「どうしてあんな小さな事件を15年経った今も覚えてるんですか

？」

「簡単だよ」

そう前置きしてから、秋山は続けた。

「君は俺と同じだから。親代わりの人間から愛されず、その幼い命は金に替えられるために消されそうになった」

「犯人が誰なのか、まだ分かっていません」

「でも君は誰がやったのか検討をつけている。違うか？」

「あなたとそんな話をするために呼んだんじゃないありません！」

リクが静かな憤りをその目に浮かべて強く言うつと、秋山はその時初めて自分の非礼に気付いたように、体を固くした。

「ああ・・・ごめん。本当にごめん。なんだか君とは昔からの友人のような気がしてて。いきなり失礼なことを言ってしまった」

秋山は急にソワソワと落ち尽きなく視線を泳がせ始め、テーブルの端に置いてあった『グリッド』の最新号を引き寄せると、うわのそらでパラパラめくり始めた。

まるでそれは叱られた後の幼児のようだ。

リクの中の「秋山」という人物像は色を変え、今そこに居るのは初対面の、少し心の不安定な男だった。

「ごめんね、リク君」

「・・・」

「本当のことを言うとな、あの事件の報道を見て、君のことが他人と思えなかったんだよ。俺も両親から愛されずに育った。最近じゃ、よく聞くだろ？ 虐待って奴さ」

リクはテーブルから目を上げ、再び秋山を見た。

なぜこの男がこんな事を言い出すのか、リクにはわからなかった。ただじっと、その神経の過敏そうな、彫りの深い顔を見つめた。

「父は母の再婚相手だったから、俺のことを気に入らなくても暴力

を振るっても、我慢できたんだ。でも次第に母親まで変わってしまったね。俺を守ることをやめてしまった。俺を無視し、疎ましく思うようになった。義父の暴力と、母親の無関心の暴力は、何かのゲームのように毎日毎日繰り返された」

秋山はじつと手の中の雑誌に視線を落としていたが、その目は、ここにはない空間を見つめているかのように虚ろだった。

「毎日毎日そんなふうだとね、どこかで感情がブロックされて、悲しみや痛みが麻痺していくんだ。ただ自分が必要のない生き物だと言っただけが心に刻まれていく」

秋山は、静かに自分を見つめているリクと再び視線を合わせた。

「こんな話、聞きたくもないよね」

秋山の問いに、リクはしばらく間を置いた後、答えた。

「話したいんでしょう？ 話せばいいよ。きっとあなたは、その為にここに來たんだから」

「・・・」

秋山は一瞬驚いたように目を見開いたが、ゆっくりと強ばらせた表情をやわらげ、

そしてどこか、夢見るような幼げな口調で話を続けた。

「9歳の夏、俺は誘拐されたんだ」

リクは表情を変えずにただじつと秋山の方を見ている。それに安心したように、秋山は続けた。

「ねえ、リクくん。昔の恨みを忘れられない病って、あると思う？」

第9話 均衡

「玉城は電話一本よこさないよね」

編集室のデスクで長谷川はポツリと言った。

「え？ 玉城先輩が、何ですって？」

PC入力作業をしていた多恵がひよいと顔をのぞけた。

他の社員は早めの昼食に出払っていて、現在編集室には二人のほか誰も居ない。

誰の策略か、いつの間にか新人の多恵の席は、長谷川の斜め前に配置されていた。

けれど長谷川を煙たく思っていない多恵には、何の支障もなかった。

「電話くらいしてくればいいのに。今時ケイタイだって国際電話できるよ」

「してくればいいのにつて、長谷川さん。なに用で？」

「何用も、これ用も……。なんかあるだろ」

「でも、玉城先輩は今、グリッドに関わってないし、長谷川さんの部下でもないですよ？」

多恵はしれつと言った。

「そりゃ、そうだけどさ」

長谷川はつまらなさそうに言うと、印刷所から上がってきた色校のチエックを始めた。

そんな長谷川を、多恵は唇に指を当ててチラリと見る。

「きつと国際電話の契約なんてしてないですよ、先輩のことだからそれか、ケイタイ水没させたか、無くしたか。それとも長谷川さんの携帯番号すっかり消しちゃったとか。けっして長谷川さんの声が聞きたくないとか、そう言う事じゃないと思いますよ」

「あんたの慰めは、傷の無いところに傷を作るよね」

「ええ？ どころへんが？」

多恵は無自覚らしく、心底驚いて訊いてきた。

「もういいよ。もしあんたの所に玉城から電話が掛かってきたら、『ちんたら、社員の有給休暇に付き合っでないでさっさと帰ってこい』って言うておいて」

「了解です。長谷川さんも寂しいんですね、先輩がいないと」

「そんなんじゃないよ」

「またまた」

「均衡が崩れるんだ」

「ん？」

「あいつがいないと、何となくバランスが崩れるんだ」

「バランスですか？」

多恵がキョトンとした。

「とにかくそう伝えといてよね、多恵ちゃん」

長谷川はそう言うのと、今度こそ校正に集中して目を伏せた。

「・・・秋山さんの目の前で撃たれたんですか？ その犯人は」
リクは、秋山が語った思い出の展開の唐突さに戸惑った。

「ああ。仲間の二人が身代金受け取り場所に、車を回して来るはずだったからね。あの人は配置されてた現金入りバッグを掴むと、気を緩めて俺から離れた。警官も誰も居ないはずだったんだ。・・・けれど、急にパンっていう乾いた音がして、あの人は俺から2メートル先で小さな黒いかたまりになった。パツと視界に散った赤い雨が、俺の顔や手に降ってきた」

恐怖なのか、怒りなのか、恍惚なのか。

秋山の表情を読みとろうとしたリクは、けれどすぐにそれをあきらめ、静かに椅子の背に体を預けた。

「ごめんね、こんなことまで話つもりは無かったんだけど。君が静かに聞いてくれるから、つい話してしまったよ。もう25年も昔の話だ」

秋山は急に素にもどり、顔を赤らめると、照れ隠しのようになり再び手元のグリッドをめくり始めた。

「その時の強烈な感情は消えていないんでしょう？ 秋山さん」

リクの言葉に秋山は笑った。

「もう25年前の話だって言っただろ？」

「誰を恨んでいるの？ 今」

秋山は口元にゴムのような笑みを貼り付かせたまま、リクの問いには答えずに無言でゆっくりグリッドを捲っていく。

30分ほどの昔話の間に、リクが煎れたコーヒーも、すっかり冷めてしまっていた。

「クリムト、カラバツジョ、ブーシェ、モロー、ブグロー……」

最新号はエロス特集かい？」

今やっとページに焦点が合ったかのように、秋山が手に持ったグリッドを見つめて言った。

リクがその言葉に笑う。

「長谷川さんが聞いたら怒るな、きっと。そういうテーマで組んで無いってね」

「エロスは健全な美の現場には必ず存在する。そう長谷川編集長に言っただけだ」といい。通俗な物とは違うよ。ほら今、俺の目の前にも一つある」

リクは笑うのをやめ、テーブル越しの秋山の目を見た。

秋山はリクに意味ありげな視線を絡めた後、再びそれを手元に落とした。

「エロスは宗教画の残酷で非道な描写の中にも存在する。私は特にカラバツジョが好きだね」

秋山は、開いたページを指の腹ですつと撫でた。

半裸の刺客に今まさに殺されようとしている聖マタイの姿を描いたカラバツジョの作品だ。

「僕は残酷で、非道ですか？」

リクが真顔でポツリというと、秋山は笑った。

「君はちがう。君は可憐なブグローのエロスだ」

秋山はブグローの『アモールとプシュケ（子供たち）』をトンと指で叩いて涼しい顔をした。

幼いキューピッドの少年、アモールが、少女プシュケの頬にキスをしている可愛らしい絵だ。

リクは、“分からない”というふうに小さく首を横に振った。

第10話 情性

秋山はブグローの絵を指さして言った。

「エロスというのは、この子のことだよ。ラテン語でアモール。イタズラ好きのキューピッドであり、恋心と性愛を司る神。愛の女神、アフロディーテの息子でね、とても美しい少年なんだ。でもドジを踏んで、自分の恋の矢で自分を傷つけてしまったため、人間の女なんかには心を奪われる羽目になった。勿体ない話だよ」

憮然としていう秋山の言葉に、リクは笑った。

「ちよつと変わった見方ですね。かわいらしい神話だと思いますよ」

「そうかな」

秋山が少し残念そうに言った。

「ねえ、君はエロスは何のために存在すると思う？ 人間はなぜ恋をすると思う？ なぜ異性を好きになるんだろう」

秋山はテーブルの上に手を組み、身を乗り出した。

リクはほんの少し視線を泳がせ、秋山の思惑を探るように、当たり前障りのない答えを返した。

「本能だから？」

「それが人間だから、という意味？ 答えてるようで、答えていない。もつと他には無い？」

「・・・命をつなげるため」

「命をつなげる、か。種の保存だね？」

「・・・」

「君もそう思うんだね、リクくん。人も動物も生きて生きて、愛や恋の名のもとにセックスを繰り返して、快楽に貪られながら自分の命をつなげていく。まるで何かに取り憑かれたように子孫を残す。その果てに何があるんだろう。」

恋も快樂も、生きる物すべての感情は生殖活動の奴隷だ。ねえリクくん、生き物は命をつなげて何を目指しているんだろっね」

秋山はテーブルの上で組んだ腕をほどき、ひじについて祈りの時にするように手を組み合わせた。

じつとリクの答えを待っているようだったが、リクが何も答えないので秋山は質問を変えてきた。

「命をつなげることを拒む人種は神への冒瀆なのかな。例えば、同姓を愛してしまう人種は、許されざる物なんだろう。だから排除され、不浄なものの扱いを受けるんだろうか」

リクはようやく秋山の言いたいことがやんわりと見えてきたような気がして、体の力を抜き、そして柔らかい口調で言った。

「命は、思いがけずこの世に生まれてしまい、そして情性で続いていると考えてみたことはありませんか？

思いがけず手に入れた命を有意義に使うために恋をし、快樂をあじわい、情性を続けるために生殖する。

まるで慣性の法則のように。そう考えれば楽になる。自分の命はどこへも届かないと嘆く必要もないし、生殖へ繋がらない性を愛したり、子を産めない女性が苦しむ必要もない。僕らの道の前に、天からの強制力なんて存在しないんです」

秋山は組んだ手に顎をつけ、しばらくじつとリクを真顔で見つめていたが、やっと小さな声で「おどろいた」と、つぶやいた。

「生命の連鎖を情性だと言われたのは初めてだ」

ポカンとした口調で言った後秋山は、次第に堪えきれなくなったようにクスクスと笑い出した。

「君はけっこう、大胆で怖い人だね。気に入ったよ。ますます君が気に入った。君ともっと話がしたい」

「あなたはお忙しいんじゃないですか？ さっきからその胸の携帯

パイプが何度もあなたを呼んでるけど」

「ああ・・・」

秋山は手を胸に当て、苦笑した。

「明日、また会おう。このグリッドに載ってない絵で、私が好きな絵があるんだ。行きつけの喫茶店に。もちろん複製画なんだけど原寸近い大きさで、とても迫力があって美しいよ。明日、またここに車で迎えに来るから」

椅子から立ち上がりながら秋山が強引な口調で言うと、リクはその顔から笑みを消した。

「いえ、結構です」

「・・・だめなのか？」

目のふちを引きつらせて、怯えたような表情を向けてきた秋山に、リクは一瞬とまどった。

「いえ・・・。わざわざ迎えに来てくださることは無いという意味です。時間と場所を言って貰えば、僕が伺いますから」

「ああ・・・そうか。ありがとう。ごめんね、我が儘を言って」

秋山はまた少しソワソワと視線を動かし始めた。

そして落ち着きのない様子のまま、リクにその喫茶店の名と場所、電話番号を書き残し、玄関口まで歩いた。

その挙動の変化は、近くにいるだけのリクの心をも不安にさせる。

“負のエネルギーを抱え込んでいる” リクの中の漠然とした不安がそう告げる。

秋山はドアを開け、リクを振り返った。

少し戸惑いがちに差し出されたその手を、リクが再びそつと握った。

「じゃあ、また明日」

消え入りそうな、弱々しい笑顔でそう囁く秋山。

リクは去ってゆくその寂しそうな背中に、思わず訊きそうになった。

『あなたが、本当に僕に伝えたかったことは、何だったのですかと。』

第11話 止まらぬ流れ

車がカーブを曲がり、バックミラーからもリクの家が見えなくなると、秋山は深く息を吐き、

再び上着のポケットで震え始めた携帯を取り出した。

「俺だ」

『ああ、社長！ どうして連絡くださらないんですか。いったい今どこに？ クラウドの社長が契約内容が違うってカンカンですよ。これから僕と村山で向こうに話を詰めに行くところなんです。早く戻ってきてもらわなければ困ります！』

29歳で専務に抜擢した右腕とも言える部下、浜崎は、かなり語気を強めて訴えてきた。

浜崎が怒るのも無理はない。この2日間、秋山は連絡も取らずに行方をくらませていたのだから。

「ああ、すまない。今日も社に戻れそうにない。君に一任するよ。俺には今、やらなきゃならない仕事があつて」

『社長の仕事はこの商談を修復する事でしょう？ 一年かけてやつとこぎ着けたクラウドとの取り引きですよ？ あそこのブラックリストに載ったら、これから先美術商としての信用はなくなりますよ！』

「・・・ああ」

生真面目な声を出す浜崎に、秋山は愛情のこもった笑みを浮かべたけれど、それが電話の向こうに伝わるわけもなかった。

「そうだな。大事な契約だ。クラウドの社長には私から連絡を一度入れるよ。そのあとで、この件は浜崎に一任すると伝える」

『・・・そんな』

「君は、頭のネジのイカレてる今の俺よりも、うまく事を運べる。頼むよ浜崎。俺はもう、この仕事を片づけなきゃ何も手につかないんだ。たぶん、そんなに時間は掛からないと思う。だから、君がしばらく商談を進めてくれ」

『・・・・・・・・』

重い沈黙を返した浜崎に、心の中で詫びながら、秋山は携帯を切った。

車が市街地に入ると、圧迫してくるビル群のせいか、秋山は急に息苦しさを感じた。

前方のビルの屋上に取りつけられた巨大画面の電光掲示板が、タイムリーなニュースを文字で流している。

『連続通り魔、依然手がかりがつかめず、住民の不安は尚も続く。

警察では警らの動員数を増やし・・・』

オレンジ色の文字が黒い画面をゆっくり蠢いてゆく。

秋山はほんの少し眉間にシワを作った後、視界からその掲示板を消すべく、車を左折させた。

その翌日の大東和出版、グリッド編集室。

長谷川は書類とバッグを持つと多恵の姿を探しながら席を立った。一昨日はリクのことがあったて、半ば衝動的に佐伯との話をキャンセルして帰ってしまったが、今日こそはどうしても出向き、今後の情報を手に入れたかった。

若き芸術家の卵をいくつも抱えている佐伯は、いわば長谷川にとつて奥の手であり、『グリッド』に欠かせない人物だった。

「ああ多恵ちゃん、一緒においでって言ったけど、やっぱりいいよ。佐伯さんの所には私一人で行くから。あんたは松川と凸版まわっていろいろ教わってくるといい」

編集室に戻ってきた多恵を見つけると、長谷川は慌ただしく予定の変更を告げた。

多恵は「了解です！」と、敬礼して見せた後、なぜか少しおどけた表情をして、足早に長谷川の側に近づいてきた。

「はっせがーわさん。お客さまですよ」
小声で歌うように耳打ちしてきた多恵を、長谷川が気味悪げに見降ろした。

「何よ、変な声出して」

「長谷川さんに、お客さまです」

「だから、誰よ」

「リクさんです」

「は？」

「だから、リクさん」

「それは聞こえてるよ」

「このフロアの喫煙コーナーで待ってらっしゃいますよ」

多恵はそれだけ言うと、少し意味深にニコリとして自分の席にもどった。

「なんでそんなところに……。こっちに来ればいいのに」

口ではそう呟きながら、長谷川の足はもうその場所に向かっていた。

リクが自分から長谷川を尋ねてくるなんて初めてのことだ。
何かあったのだろうか。

いや、何かあったとして、長谷川のところに来る男ではない。
今までは。

いぶかる反面、今までにないリクの行動に、少しばかり嬉しくなっ
たのも本心だった。

第12話 頼み

「どうした？ リク」

長谷川が声をかけると、リクは二台並んだ自販機の横の壁にもたれたまま振り向き、真っ直ぐ長谷川を見た。

蛍光灯の灯りのせいか、いつにも増してリクの顔色は青白く、長谷川を不安にさせる。

「あんたさ、なんか病気とかじゃないよね。・・・本当にちゃんと食事してる？」

また同じ事を訊く長谷川が可笑しかったのか、リクは笑った。

「大丈夫だよ」

「それならまあ、いいけど。で？ 何かあった？ 珍しいよね、あんたが自分から会いに来るなんて」

「近くまで来たから、長谷川さんの顔、見たくなって」

長谷川は怪訝そうに目を細めてリクを見つめた。

いつもながらその作り物のように綺麗な顔から、内面が見えてこない。

「いつからそんな面白くもない冗談を言うようになった？ 嘘つきなのは知ってるけど」

「ひどいな」

「仕事中なんだよ。早く用件を言いなさい」

わざと少し苛ついた声を出して見せた長谷川に、リクは一瞬間を置いた後、ようやく切り出した。

「昔抱いた恨みが忘れられない病って、あると思う？」

その唇から唐突に発せられた言葉は、奇妙な響きをもって長谷川に届いた。

「え？」

「小さな頃抱いた感情は、時間と一緒に風化していくもんなんじゃないの？」

「・・・そうだね。名前は忘れたけど、そんな症候群はあるよ。でも、病氣以前にその性格にも寄るだろうね。どんな体験をしたかにも寄るし」

長谷川はリクの表情を探りながら続けた。

「それは誰の話？」

「昨日、秋山さんといろんな話をしたんだ」

「あの男とまた会ったの？ あの男はダメだって言っただろ？ プライベートで会っちゃダメだよ。リクを見る目が普通じゃない」

「何か勘違いしてるよ、長谷川さん。秋山さんはそんなじゃない」

「じゃあ、どんなんだ」

「僕と同じなんだ」

「え？」

「あの人は・・・」

リクはふと、プライベートな事をこれ以上喋ってもいいものか迷うように、言葉を止めた。

「そこまで言いかけたんなら吐き出しちゃいなさいよ。私もあなたも消化不良になる。大丈夫、私の中で止めておくから。・・・あんなさ、自分のことで手一杯なんだ。人の気苦労まで背負い込んだら死んじゃうよ」

長谷川が幾分やさしげにそう言うと、リクは少し安心したように小さく息を吐いた。

「手を差し伸べてくるんだ。小さな子供のように。でも僕は、それをどうしたらいいのか分からない」

リクは先ずそう言った。

長谷川は一瞬ポカンとしたが、辛抱強くリクの言葉を待った。

この青年が、自分の心の内を人に伝える順番は、もどかしいほど人と違っている。

この上なく不器用で、慎重だ。

けれど、的を外したことは一度も無かった。

人には見えない霊を見ることができるよう、リクには生きている人間の持つ不穏な魂の震えを嗅ぎ分けることが出来るのかも知れない。

長谷川は勝手にそう思っていた。

そして、だからこそ、その荷の大きさに時々押しつぶされそうになり、不安になる。

その不安を緩和したくてリクが今ここに来ているのだとしたら、長谷川には喜ばしいことだった。

「長谷川さん。25年前の事件って、調べることができる?」

「25年前の事件?」

リクは長谷川に小さく頷いた。

「9歳の子供が誘拐され、犯人はその子の目の前で射殺された」

「誰の話? その子って誰よ」

「秋山章吾」

「・・・秋山?」

「難しい?」

不安そうにそう訊くリクに、長谷川はニヤリとした。

「日本中のデータベースひっくり返したって調べてあげるよ。秋山って男に興味はないし、どうなろうと知ったこっちゃないけど。あなたの頼みだから」

「そうとう彼のこと、嫌いだね」

リクは可笑しそうに笑った後、礼を言った。

「で? それを調べたら何が出てくるの? あんたを少しは楽にさ

せられる？」

「僕とは関係ないよ」

「じゃあ、さつき何で秋山が《自分と同じだ》って言ったの？」

「ああ……。あの人が言ったんだ。僕と秋山さんは同じだって」

「何が」

「二人とも、愛されずに育った子供だって」

「は！？」

「愛されずに育った人間はみんな、どこかおかしくなるんだって」

リクは一瞬自嘲じみた笑いを口元に浮かべたが、鬼のような形相になった長谷川を見て、すぐにその笑みを消した。

「秋山ー！ やっぱり一発殴つとけば良かった！ あーっ、ムカツク！」

リクはその憤慨ぶりに少し驚いたのか、反論も茶化す事もせず口を閉じてしまった。

長谷川自身、今日の自分のイライラは度を超していると気付くほどだった。

どうにも説明の付かないイライラだ。

ただただ、秋山に「お前に何が分かる！」と怒鳴りつけてやりたい気分だった。

けれど横で、なぜか怯えた犬のような目をしているリクに、あまり醜態を見せるのも癪で、長谷川は話を切り替えた。

「ねえ、話の続きは外でしない？ これから佐伯さんのところに行く用事があるんだけど、リクも一緒に行こうよ。ほらこの前、私が邪魔しちゃったから佐伯さんと話、出来なかったでしょ？ そうだ、ついでにさ、リクの絵を秋山にホイホイ売らないように言っところかな」

「それもどうかと思うよ。子供みたい」

「うるさいね。……冗談に決まってるでしょ。冗談。……出る用意してくるからちよと待ってて。昼食まだだったら、何か食べて

いこうか？」

編集室のほうへ歩き出しながらせわしなく言う長谷川。

「ごめん、僕は行くところがあるから」

「え？ どこ？」

「秋山さんと、デート」

長谷川は一瞬固まってリクを見た。

「冗談に決まってるだろ？」

リクはイタズラっぽく切り返した。

「喫茶店で少し話するだけだよ。そのお店、秋山さんの的にグリッドのエロス特集に載せて欲しかった絵が置いてあるんだって。複製画らしいけどね。長谷川さんも、いつか行ってみる？」

リクはそう言くと、小さく折り畳んだメモ紙を長谷川に手渡した。

「じゃあ、佐伯さんによろしく。仕事中につまらない事で時間取っちゃって、ごめんなさい」

それだけ言くと、リクは少し急ぐように階段を駆け下りていつてしまった。

長谷川は、青年のフワリとした柔らかそうな髪が見えなくなるまでじっと階段の方を見つめた後、

その手の中のメモに目を落とした。

秋山に誘われ、これからリクが向かうのであろう喫茶店の名と、電話番号だ。

あのリクが、「不安なのだ」と、隠しもせずに、こんなふうに長谷川に伝えてくる。

ムズムズするような、奇妙な高揚感と、リクを苛む不穏な空気への憤り。

相反する二つの感情を腹に収め、長谷川は一つ身震いした。

「どいつも、こいつも。．．エロス特集じゃないっつーの
と、それらを振り払うように、一つ眩きながら。」

第13話 イサクの犠牲

秋山が指定した喫茶店は、佐伯の画廊、無門館から一駅ほど離れた静かな商店街の中程にあった。

レトロで重厚な雰囲気を感じつつ、白く塗られたアーチ型の出窓が、ホツとする可愛らしさを演出している。

一歩中へ足を踏み入れたリクを、エントランスの飾棚に並ぶ小物達と、香ばしいコーヒーの香りが優しく迎えてくれた。

しつこいの壁には、様々なタッチの無名画家の絵画が飾られており、ギャラリー喫茶になっているらしかった。中はわりと広く、十数人の客がカウンターや窓に面した席に座っている。

「ミサキ様ですね？ 奥の席で秋山様がお待ちです」

小柄な若いウエイトレスが、初対面にもかかわらず、エントランスに立っていたリクに声をかけ、

ホールからは死角にあたる奥の席へ案内してくれた。

案内されたその席は、観葉植物とパーテーションで自然な感じに仕切られた3畳ほどのブースになっており、左壁面にはF80はありそうな、迫力のある複製画が飾られていた。

秋山は渋い顔でその絵をじっと見ていたが、リクに気付くと途端に相好を崩し、嬉しそうに笑った。

「息を呑むほど綺麗な青年が来るから、ここに連れて来て欲しいと店員に頼んでおいたんだ。どう？ 一発だろ」

「・・・」

リクが返答に困っていると、秋山は再び笑顔になり、リクの腕をそっと掴んで引き寄せた。

「ほら。正面から見てごらん。このレンブラントは圧巻だろう？」

その絵はおよそ、この落ち着いた雰囲気のギャラリー喫茶に似つかわしくない、ショッキングな宗教画だった。

山の牧場に作られた粗末な祭壇の上に、白い肌を露わにした半裸の少年が、髭をたくわえた老人に顔面を押さえつけられている。

老人の振り上げた小刀が、そのむき出しの首の上に振り上げられた瞬間、突如現れた天使がその老人の凶行を止める。

老人の表情と、その手からポロリと離れ落下してゆく小刀とが劇的な一瞬を演出し、躍動感を残したまま二次元に封じ込められている。

「『イサクの犠牲』ですね」

リクがポツリと言った。

「そう。少々悪趣味だろ？ ここのマスターのイタズラだよ。このブースに入った客は、必ずみんなビクリするらしい」

秋山は楽しそうに笑った。

リクは改めてその絵を見た。

複製画ではあるが、その絵からにじみ出る異質なエネルギーが胸を圧迫する。

『イサクの犠牲』は旧約聖書を出展とした物語だ。

砂漠の神は、アブラハムという男の振興を試すために、彼の最愛の息子イサクをモリヤの丘の岩で焼いて、神に捧げよと告げた。

悩み抜いた末、神への忠誠を証明しようと決心したアブラハムは、イサクを丘へ連れてゆく。

今まさに、その命を絶とうと小刀を振り上げた瞬間、天使が現れ、その手を止めるのだ。

そして天使は『あなたが神を恐れる者であることが分かりました。息子はあなたに返します』と神の声を伝え、イサクは救われる。

この物語が、アブラハムの神への忠誠心を讃えるものなのか、砂漠の神の冷酷さを表すものなのか、リクにはよく分からなかった。アブラハムが息子の転生を信じていたとしても、愛する子供に小刀を振り下ろす男や、それを強いる神という存在に、薄ら寒いものを感じた。

「喫茶店にはふさわしくない絵かも知れませんがね」

リクがぼつりと本音を言うと、秋山はイタズラっぽく笑った。

「イサクの犠牲は、カラバツジョやサルムや、たくさん画家が描いているが、俺はレンブランドが一番グツと来るね。肉感的で、非情で、狂気じみてる。アブラハムの行為は愛する息子へのモノとは思えない。まるで屠殺^{とくじつ}する羊のような扱いだ」

「そう言うのが好きなんですか？」

「・・・そういうのが好きかって？」

秋山はリクの質問を繰り返した。その顔に、さっきまでの笑みはない。

「そうだね。この毒々しい圧迫感がなんともいいね。劇的で攻撃的で隠微だよ。神の子羊はいつも哀れで愛おしい。哀れであればある程、愛おしい。だけど、・・・残念なことに出来すぎて。うまく行き過ぎてて、次第に高揚感は腹立たしさに変わって来る。ねえ、君もそう思わないか？」

「画面の構成力が、つてことですか？」

「違うね。展開だよ」

「展開？」

「展開然り。危機一髪のところでは駆けつける天使のタイミング然り」

「・・・」

「天使が来なかったらどうなってたと思う？ アブラハムは大事に育てた愛おしい息子の喉を切り裂くんのだ」

その声は、この余りにも子供じみた発想とは裏腹に、ゾツとするほど冷酷に感じられた。

「そういう物語ですから。それに、そんな最悪な展開は想像する意味もないでしょう？」

「天使は来ないんだ」

「え？」

「俺の前に、天使は来なかった」

リクは再び秋山の表情をチラリと伺ったが、すぐに目をそらし、複数画に視線を戻した。

秋山の目の中に沸き立つような怒りを見たような気がして、長く見つめていることができなかった。

第14話 秋山という男

平日の昼過ぎの佐伯の画廊、『無門館』は、この日もガランとしていた。

絵を見ながらゆっくり語れることもあり、長谷川は、佐伯にグリッドの企画の相談を持ちかけるときには大概、この時間を狙う。けれどもフロアには佐伯の姿はなく、その代わりに先客が居た。

若いがきつちりとスーツを着こなした、いかにも商社マンといった青年だ。

その青年はじつとリクの絵の前に立ち、鑑賞と言うより挑むような目でそれを見つめていた。

長谷川には、どうにもその目つきが気になった。

「いい絵でしょ？ でも、変ね。そのミサキ・リクの絵はもう売約済みのはずなんですけどね。何でまだ飾ってあるんだろう・・・」

長谷川は、青年に話しかけると言うよりも、大きな独り言のように呟いた。

青年は長谷川を振り返り、ほんの少し笑った。

「ええ、知ってますよ。この絵はウチの社長が買ったんです。この画家の絵が大好きで。佐伯さんが寂しがるので、もう少しだけここに置いてあげるんだって言ってました」

長谷川は少し驚いて、改めて青年を見つめた。

実直そうな、正のエネルギーに溢れた目をしている。

「秋山さんの会社の方？」

その言葉に青年は、再び落ち着いた笑みを返してきた。

青年は浜崎と名乗った。

秋山と昨日から連絡が取れず、ここに来ればもしかしたら居るかも

知れないと思つたらしい。

ここに秋山がいるかも知れないと思うこと自体、秋山の拳動の異常と、そのせいでこの青年が切羽詰まつてゐる事が伺われる。

しかし秋山は今、リクと会つてゐるはずだ。

長谷川はそう思つたが、その事実を告げる言葉は取りあえず飲み込んだ。

何か秋山なりの事情があるのかも知れない、と。

そしてリクは今、恐れながらもそれを確かめようとしているのだ。

浜崎は探し疲れてしまつたのか、それとも本当に仕事に追いつめられて弱つてゐるのか、溜まつてゐるモノを吐き出すように、長谷川に語つた。

「ある雑誌で、このミサキ・リクという画家の事を知つてからの社長は、少し変でした。どこか浮き足立つたような、落着かないような……。例えば変ですが、まるで恋い焦がれた昔の想い人に再会したような、そんな感じでした。社長を捜すつていうのは建前で、本当は僕、この絵を見に来たんです。この絵に一体どんな魔力があるんだらうつて」

声は穏やかだつたが、端正なその横顔には、僅かに苛立ちがちらついて見えた。

「どう？ 魔力は感じられましたか？」

「美しい絵です。でも僕にはただ、それだけです。何も感じません」
長谷川はその言葉に笑つた。

「そうでしょうね。リクの絵はそんな風に睨みつけて眺めても、何も語つてくれないから」

浜崎はほんの少し顔を赤らめた。

「いえ、そんなつもりは」

「秋山社長が商談すつぽかしたり、仕事ほつぽり出したりするのは、リクのせいだとも？」

「いえ、そうは思っていないません。確かにここ数か月、ミサキ・リクの絵を購入するようになってからは、心ここにあらずと言う感じでしたが、社長が本当に何かに取り憑かれたようになったのは、この2、3日ですから」

「へえー。何かあったのかな」

「ニュース・・・」

「え？」

「一緒に昼食を取ってたら、ちょうどTVで通り魔のニュースが流れたんです。ひどく驚いた様子で。それからです」

浜崎は面白くもない冗談を言った後のような、自分をあざけるような笑みを浮かべた。

「・・・なんの関係があるの？ それと、社長と」

「さあ。関係ないんじゃないですか？」

「・・・」

浜崎の言葉は、初対面の長谷川に投げるには、あまりにも横柄でぞんざいだった。

「わからなくなっちゃったんです。社長のことは誰よりも理解出来てると思ってたのに。僕なりに、社長の右腕になれてると思ってたのに。数ヶ月前、『グリッド』っていう雑誌でこの画家のことを知ってから、社長は何となくすべてがうわのそらでした。そして数日前、完全に社長は別人になってしまった。僕が理解していた人物とは、別の人になってしまったんです」

この男は、それらの変化全てに戸惑い、疲れ、苛立っているのだ。長谷川はそう理解した。

リクの事を発端に、どんどん自分の知らない秋山になって行くのが苦しいのだ。

毎日毎日少しずつ近づき、理解を深め、信頼を得たと思っていた上司との関係を、一瞬にして奪ったものの正体を探しているのだ。

そう思いながら黙っていると、浜崎はやはり絵を見つめたままポツリと呟いた。

「あなたは・・・グリッド編集部の長谷川さんですね」

長谷川はゆっくり振り返り、その青年の横顔を、改めてじっと見た。

第15話 心の内

「なんだ。知ってて私に話を？」

長谷川は無表情のまま浜崎を見つめ、そう言った。

「佐伯さんが、『グリッド』の編集長がもうすぐここに来るからっておっしゃって。だから待ってたんです」

「それで？ 私にリクの特集を掲載したことを抗議したいわけ？」

「ねえ、長谷川さん。・・・ミサキ・リクって何なんです？ 社長にとって、何なんでしょうか」

長谷川は、純粹で素朴で、それでいて大胆な浜崎の質問に思わず笑みを浮かべたが、悟られないように顔を反らした。

そもそも、秋山のことは私よりもあんだの方がよく知ってるだろう、と言いかけたが、それもやめた。

何にすがって良いか分からない心許なさを若い目元に滲ませている青年が、少しばかり気の毒に思えてきたせいでもある。

そして何より、自分は秋山の奇行の原因の一つを知っているのかもしれないという、後ろめたさもあった。

リクが語ってくれた、リクと秋山の共通点。

秋山は自分の中に消えない《愛情の飢え》を、自分の妄想の中で育てた《リクという同胞》に直面することによって再燃させたのではないだろうか。

そしてその救いを、誰でもない、リクに求めているのではないだろうか。

もしそうであるなら、ある意味常軌を逸している。どこかに正常でない心の動きを感じる。

『愛されずに育った人間は、どこかおかしくなるんだ』

秋山がリクにそう言ったのは、何かの信号だったのだろうか。

「ねえ浜崎さん。秋山社長は以前から何か奇行があつた？ 精神的に不安定だとか」

その言葉に噛みつく勢いで、浜崎は長谷川を睨みつけた。

「社長はどこまでも思慮深く穏やかで、立派な人です！」

「なるほどね」

一切まわりに自分を見せずに生きてきたわけだ。

長谷川の中で秋山という人間が、少しずつ整理されてきた。

その途端、リクの言葉が鮮明に蘇ってきた。

『昔の恨みを忘れられない病つてあると思う？』

あれは警告だろうか。

秋山から、リクに発せられた警告なのかもしれない。

リクが語り、調べて欲しいと言った秋山の9歳の頃の誘拐事件。

親から虐待を受けていた9歳の秋山を誘拐し、身代金を受け取るうとした犯人が、警察に撃ち殺された。

秋山の目の前で。

そんな壮絶な体験をした9歳の少年が抱く『恨み』とは何だろう。誰を恨むのか。

そしてなぜ秋山はリクに、そんな話を振ってきたのか。

まるで感心の無かった秋山の物語は、そこにリクが存在が入り込んだために、長谷川の好奇心の対象となった。

「ニュースを見てから様子がおかしくなつたって言った？ 秋山は」
浜崎は少し驚いたように長谷川を見た。

「・・・ええ、まあ。でも、きつと何も関係ありません。あんな事件」

「そうかもね」

でも、ついでだよ。何かを調べるのなら、情報は多いほど良い。
長谷川は心の中でそう呟き、不安そうな表情になってしまった浜崎
に、優しさのこもった笑みを返してやった。

「天使なんか来ないんだ。そうだろう？」

秋山は重厚なウォールナットのテーブルの上で、組んだ手に体重を
かけるように身を乗り出した。

奥二重の中の空洞のような目が、リクの心を探ろうとするように見
つめてくる。

手焼きのカップに入ったコーヒーはほとんど手をつけれないまま、
すっかり冷えてしまっていた。

秋山の中にある固執した感情に薄ら寒いモノを感じたが、リクは視
線を外さなかった。

“助けてくれ”

肉体ではない、どこか別の部分からそう叫ぶ秋山の声が響いてくる。

「天使は来ない。10歳の少年は金のために養父母に背を焼かれる
し、9歳の無力な子供はやっと出会えた救世主を、正義を気取った
大人に撃ち殺されるんだ」

「落ち着いて、秋山さん」

「俺は落ち着いてるよ。ずっと冷静だった。何も考えないように生
きてきたんだ。唯一俺に愛情をかけてくれた男が消えてしまった時、
もう悲しむのも求めるのもやめようと思った」

秋山の目が、幼い子供のように所在なく動く。

「19歳の時に、岬璃久という少年のニュースを見て心臓が震撼し
た。衝撃だった。それは哀れみじゃなく、仲間を見つけたような安

心感・・・いや、正直に言えば、喜びだった」

リクは、ただ黙って秋山を見ていた。

「毎日毎日、その哀れな少年が気になってね。週刊誌でその姿を見たとき、まるで恋に落ちたような、不思議な気持ちになった。同時に自分は頭がおかしいんだと思った」

いったん言葉を止め、冷めたコーヒーを啜ると、秋山は俯いたまま悲しく笑った。

「4カ月前、君が画家としてデビューしているのを『グリッド』で知り、手に届くかも知れないと分かってから、また昔の感情が沸き立ってきた。同時に、その根元となった昔の苦々しい感情も、熱を帯びて沸き上がってきたんだ」

「それはその、誘拐事件のこと？」

リクがそこで口を挟むと、秋山はゼンマイの切れた人形のように動きを止めた。

「ねえ、秋山さんは肝心なことを少しも話さないよね」

「・・・」

「あなたはその犯人が大好きだったんだね。たぶん・・・愛してた。違う？」

笑い飛ばそうと口元を歪ませた秋山は、リクの澄んだ真っ直ぐな目を見て、それを諦めた。

リクは尚も続けた。

「あなたの憎んでいるのは、だれ？」

秋山は、今度は貝のように口を固く閉ざした。

「その怒りを鎮めることはできないの？ そうすれば楽になるよ。あなたの戦いは終わるかもしれない」

「君の中の戦いは終わったのか？」

唐突に秋山は口を開いた。

「僕の？」

「愛されず、金のために殺されかけた傷は癒えた？　きつとまだ、その背中に生々しく残ってるんだろう？」

「僕は養父母に殺されかけたわけじゃない。犯人は分からないんだ」「君は、分かっている癖に」

「事実かどうか分からない事で悩むのはやめたんだ。そうじゃないと、先へ進めなくなる」

「先？　先には何がある」

秋山が口元だけでゾツとするような笑みを浮かべた。

「俺には先がないんだ。嫌らしい過去ばかりが足元に絡みつく。希望も尊厳も自己愛も、あの日大切な人と一緒に奪われた」

「どうして？　僕らはもう、一人では何も出来ない子供じゃないよ」

リクがそう言った瞬間、秋山は組んでいた手を放してグイと右手を付き出し、テーブルに置かれていたリクの左手を強くつかみ、唸るように言った。

「君なら理解してくれると思ってたのに」

包帯をした左手首をいきなり掴まれ、リクは一瞬ビクリと身をすくめた。

その感触に気付いた秋山は、引つ込めようとするリクの手首を更に強くつかんで、微かに笑った。

「ここ、どうしたの？　手首、切った？」

リクは目を見開いて固まった。

秋山の笑みと言葉に心の奥が震え、動くことができない。

二人はそのまま、ただじつと黙って互いの目を見つめ合った。

「その手を放しなさい！」

大きく太い声がブースに響き渡り、その場の張りつめた呪縛が解け

た。

きつと他のテーブル席にまで聞こえたであろうその声の主は、地獄の番人のように目をつり上げ、秋山を睨んでいた。

「長谷川さん」

リクがそう呟くと同時に、秋山はリクから手を放し、何もなかったかのように椅子に体を沈めた。

リクはすぐに左腕を引き、テーブルの下に潜り込ませた。鈍く疼く痛みに一瞬顔を歪ませながら。

長谷川は黙ってそんなリクを見、そのあと秋山に鋭い視線を送った。

「何のつもりです、秋山さん」

「・・・何のつもり、とは？」

秋山は口元にしれつとした笑いを貼り付かせながら長谷川を見た。

「リクに乱暴するなど言ってるんです」

「そんなつもりはありませんよ。少しばかり話に熱が入っただけで・・・それより、あなたはリク君の何なんです？　ただリク君をネタに使った雑誌の編集者でただけでしょう？」

サラリと言った言葉は、明らかに長谷川の逆鱗に触れた。

怒ることに、長谷川の声は低く、落ち着いてゆく。

「リクはリクで、いろんな問題を抱えてるんだ。自分の問題は自分で解決したらどうなんだよ！　秋山さん」

ああ、良くも悪くも、いつもの長谷川に戻ってしまった。

目に敵意を持って長谷川を睨む秋山を見つめながら、リクは戸惑った。

時間をかけて秋山の声を聞こうと思っていたリクの計算は、長谷川によってひっくり返されてしまった。

けれど、さっきまで体の至るところに停滞していた血液が、やっと正常に流れ出したような安堵感が、リクを包み込んでいた。

長谷川がくれた、安堵感だった。

第16話 変化

秋山と別れ、喫茶店を後にした長谷川とリクは、無言のまま地下鉄への階段を下りた。

「心配してくれるのは嬉しいけど、さっきのはちょっと、言いすぎじゃ無かったかな」

ちやうど滑り込んで来た地下鉄に乗り込み、長谷川の横に座りながら、リクの方から先にその沈黙を破った。

昼下がりの地下鉄は空いていて、少しばかりそんな話をしても誰にも聞かれることは無さそうだった。

「気に入らないね」

長谷川はわざとムスリとして言った。

「秋山さんが？」

「あんたが、だ！」

「僕？」

「あんただ。会おうって言われりや、いつだってどこだってホイホイ応じてさ。あんただって内心怖いんだろ？ あの男が」

リクはそのストレートな質問に戸惑ったのか、少し考え込むように黙った。

「私や玉城が誘い出したって、いつも面倒くさそうに渋る癖に。あいつにはしつぽ振ってホイホイだ」

この際だからと、少し大人げない言葉を吐いたあと、長谷川はリクのほづをチラリと見た。

羨ましくなるほどキメの細かい若い肌と、相変わらず息を呑むほど美しいその横顔は、間近で見ている長谷川を息苦しくさせた。

更に、誰も居ない正面の座席をボンヤリ見つめているリクを見ると、自分が意地悪を言って苦しめているように思え、どうにも気

分が悪かった。

「・・・もういいよ。もう言わない。客サービスだもんね。あんたのビジネスだ。ごめん」

「きつと、寂しいんだ」

唐突にリクが呟いた。

「ん？」

「あの人の孤独が伝わってくる。誰にも理解されない部分で、助けを求めている声が聞こえた」

リクは前の座席を見つめたまま、長谷川にやっと聞こえるほどの声で言った。

「僕に何が出来る訳じゃないけど、話を聞いてあげようと思ったんだ。あの人は僕に何かを伝えようとしている」

「甘えてるだけだよ。いい年して」

そう長谷川が言うと、リクは柔らかく笑った。

「覚えてる？ 玉ちゃんがさ、僕のことを冷たい人間だって言ったんだ。前に」

「それはずっと前の話でしょ。・・・まさか、そんなこと気にしてるの？」

「僕は自分から他人に関わろうと思ったことも、受け入れようと思ったことも無かった。玉ちゃんの言うとおり、冷たい人間なんだ」

「いいじゃん、それでも」

「でも今、あの人は僕を頼ってる。僕に何か出来るならしてあげたいんだ。変わらなきゃ、って思う」

今まで交わしたことの無いリクとのそんな会話に、長谷川は心臓のあたりがズンと衝撃を受けたように感じた。

奇妙に、落ち着かない。胸を掴まれたというのは、こういう感覚なのだろうか。

降りるべき駅が近づいている。

出来るならもう少しこうやって、心の内を見せ始めた青年の横に寄り添って座って居たかった。

「無理に変わらなくていいよ。リクはリクのままでいい。あんたは良いところいっぱい持つてるし、私はそのまんまのあんたを気に入っている」

長谷川がそういうと、リクは驚いたように長谷川の方を向いた。

きれいなラインを描く目の中の、琥珀色の濡れたような瞳に見つめられた一瞬、ゾワリと長谷川の肌が粟立った。

自分は妙な事を言ってしまったのだろかと、ふと思い、降りる駅のアナウンスが流れてきた所で長谷川は少し慌てながら立ち上がった。

「社に戻ったら秋山の事を調べてみるよ。あんたが気に掛かっていることが見えてくるかも知れない。言っておくが、あんたのためでも秋山のためでもないよ。ちょっと興味が沸いたからだ」

「うん。ありがとうね、長谷川さん」

電車が止まると、ドアに向かう前に長谷川は振り返ってリクに訊いた。

「ねえ。本当にその手首は、捻挫だよな」

リクはほんの一瞬間を開けたあと、今日見たどれよりも優しい表情で、「うん。そうだよ」と笑った。

第17話 事件を探る

長谷川は編集室に戻るとすぐにPCを立ち上げ、指以外はピクリとも動かさず、異様な集中力で画面を睨みつけていた。

25年前とはいえ、9歳の子供が誘拐され、その子供の目の前で犯人が射殺されるなどという大きな事件は、ものの数秒でデータベースの検索に引っかけた。

長谷川はそれについての雑多な関連記事も合わせて、詳細に調べていった。

9歳の秋山章吾を誘拐し、射殺されたのは幸田純21歳。

地元の東央大を中退し、バイトを掛け持ちしていたフリーターだ。

事件発生後警察側は、当然まだ誰ともわからない犯人の要求に従い、身代金を一人の若い警官に持たせ、電車とバスで指示された場所に向かわせた。

指示した場所にまた次の指示を書いたメモを置くという犯人の作戦は、追跡を困難にさせた。

11回に及ぶその行動の中、その警官は指示通り、札束をそのうちの指定された《ある一カ所》に置いてくるしかなかった。

車での追跡も不可能な以上、完璧に犯人の有利だと思われたが、警察の抵抗に奇跡は起きた。

警官がつけていた発信器を、たまたま警ら中の覆面パトカーがキャッチした。

そしてパトカーを降りた二人の警官が目をつけた建物。その廃材置き場こそ7番目のポイント、つまり現金を置くように指定された場所だったのだ。

現金受け渡し係の若い警官が、犯人の指示によりカムフラージュで膨らませたカバンを抱えてその場所立ち去るのを見届けたあと、近

辺に潜伏していたその二人の警官は周囲を囲った。

まだそこが指定のポイントだとは警官らは分らない。

けれども、なんの危険性も感じていなかった犯人（幸田）は、ものの30分ほどで、秋山少年を連れて姿を現したのだ。

あらかじめ幸田らは、その近辺に身を隠していたのだろう。

そして身代金の入った麻袋を手にし、幸田が少年から身を離れた瞬間、警官の二人が同時に発砲。

威嚇射撃のはずの、そのうちの一発により、幸田は息絶えた。

幸田は確かに誰かの車を待っているようにも見えたが、共犯者がいるという証拠は何も出てこなかった。

9歳の秋山少年に訊いても、ショックが強すぎたらしく、何も覚えていないとただ泣いただけだったという。

警察も叩かれはしたが、結局単独犯、被疑者死亡という形で、この事件は解決した。

「何も覚えてない・・・か」

長谷川はぼんやり呟いた。

あやしいな。そう感じた。

もちろん精神の防衛本能が、少年の記憶を混乱させ、消去してしまふ事だつてあるかもしれない。

そして、秋山少年が共犯者についての情報を、何も持っていなかったことも考えられる。

けれど長谷川はリクが言った言葉が心に引っかかっていた。

『昔抱いた恨みが、忘れられない病つてあると思う？』

あれは確かに秋山がリクに言った言葉だ。

病だと思ふほどの強烈な恨みが、秋山の中に潜んでいる。

この事件で少年が恨んだのは誰だろう。

犯人？ それならばそこで恨みは晴らされた。

警察官。しかし、自分を守ろうとした警官を恨むだろうか。

あと考えられるのは、居ると仮定した場合、共犯者だ。

もしも殺された犯人と少年の間に、何らかの絆が生まれていたと仮定するならば、それが一番しっくり来る。

長谷川はPC画面からようやく体を離し、椅子の背もたれに体を預けた。

「ああ、忌々しい！　こんな事、本人の首根っこ捕まえて揺すって吐かせればいいんだ」

長谷川は天井を仰いで一人ぼやいた。

リクが気にかけてさえいなければ、長谷川にとって、あんな男どうでもいいのだ。

「何ひとりでブツブツ言ってますか、長谷川さん」

長谷川の横で、多恵が面白そうにニタニタしていた。

「あれ？　いつから居たの。松川と凸版まわって来たんじゃないかった？」

「松川さん、下痢っぴーなんで、早々に帰って来ちゃいました。今、トイレです」

「何だそれ」

「それよりニュース見ました？　また通り魔ですよ。いったい警察は何やってんでしょうね」

「また出たの？」

「今度は若い女の子ですって。かすり傷らしいですけど。こうなったらもう、本物が模倣犯か、分かりませんよね」

長谷川は一瞬考えたあと再びPCに向かった。

浜崎が語った、『通り魔のニュース』のくだりが、閃光のように頭をよぎったのだ。

「多恵ちゃん、あれ、何とか言ったよね。何日か前に通り魔らしき男に殺された人」

「ああ。えーと、・・・クリリンとかキリストみたいな名前でしたね」

「なんだクリリンって」

そう言ってる間に、その記事は検索に引っかかり、画面に表示された。

長谷川の目が素早く文字を拾ってゆく。

「久留須道夫46歳。・・・これだ。25年前は21歳。ええと、・・・大学はどこだ？」

「なに調べてんですか？」

「うるさいな。・・・あった。幸田と同じ東央大だ！学部も同じ」

「やりましたね！」

「ああ、きつとここから糸がほつれて・・・」

そう言いかけた長谷川の目が細まり、クイと多恵を見た。

「なんで多恵ちゃんが喜ぶの」

多恵はニコリと笑った。

「だって、リクさんの事でしょ？」

「・・・なんで知ってる？」

「長谷川さんが必死になるのはいつだってリクさんの事だから。何かわかんないけど、応援しますから頑張ってください！」

多恵は満面の笑みを浮かべ、ガッツポーズした。

「・・・ああ、・・・うん」

「じゃあ、私は松川先輩救出のために、男子トイレに行つて来ます。

長谷川さんは、リクさんを宜しく！」

パキッと敬礼して見せると、多恵はクルリと向きを変え、編集室を出ていってしまった。

「・・・相変わらず変な奴」

長谷川は不意におかしくなつて、クスリと笑った。

そしてプリントアウトした情報とカバンを手にとつと、壁の予定表に 取材後、直帰 と書き込んだ。

今夜は少々面倒な取材になりそうな予感がしたが、多恵にまであ言われたのでは、頑張るより仕方が無い。

「何だかんだ言つたつて、リク。あんたを慕う人間は、たくさんいるよ」

少し忌々しげにそう呟いた後、長谷川は編集室を後にした。

第18話 狂気の狭間で

『眠れない？ 大丈夫だよ。怖いことは何も無いからね』

幸田の声はとても優しく甘く、9歳の少年の頭の中に溶け込み、体の隅々に染みこんだ。

『君を傷つける二人に、少しばかり代償を払ってもらっただけだよ。

この仕事が終わって一旦君を帰して、ほとぼりが冷めたら、改めて君を救いに来るから。時期をみて、あの二人が君にした酷いことをちゃんと裁いてもらおうね。二度と君に手出しが出来ないように』
ベッドに横になった秋山少年の髪や頬を優しくなでる幸田の手はとても温かく、少年は今まで感じたことのない安堵感と、腹の中からわき出すような興奮に満たされた。

『僕、内緒にするよ。約束する。お兄ちゃん達のこと、絶対誰にも言わない。そしたらまた会えるんだよね』

『もちろんだよ。僕らは仲間だから』

幸田は少し垂れ気味の優しい目を細めて笑った。

『・・・仲間か』

幸田の後ろで、幸田とは別の種類の笑いを浮かべた男が二人、立つてこちらを見ていた。

“このお兄ちゃんたちは嫌いだ”

その時、直感でそう思ったのを秋山ははっきり覚えている。

幸田は二人の男達を、『君を助ける天使たちだ』と、すこし冗談めかして言った。

この計画を立てたのも、君のことを自分に教えてくれたのも、その二人だと言った。

『ほら、二人とも神々しい名を持つてる。久留須に羽白』

だが秋山はそうは思わなかった。

秋山にとっての天使は幸田だけだった。

その温かな優しい手で、秋山の体に、心に触れ、包み込んでくれるのは幸田だけだった。

秋山は耳にまだ残っている幸田の声を懐かしむように思い浮かべる反面、自分の中でそれを求め焦がれる熱が、それ以上高ぶらないように押さえることに神経を集中した。

『おまじないだよ』といってシャツを脱がせ、幸田が口づけた胸や下腹が、再び熱を吹き返さないように。

右手に持った刃渡り12センチの小振りな折り畳みナイフを閉じたり開いたりしながら、電気の消えた自室の暗闇の中で、浅く呼吸を繰り返す。

『あなたの怒りは鎮めることが出来ないの？』

窓の外の明かりにキラリとナイフが煌めいたと同時に、昼間のリクの声が蘇ってきた。

重く鈍い胸の痛みを感じたあと、秋山は唇を左右にゆっくりと開き、嗤った。

その嗤いが何なのか、秋山自身にも分からぬまま、ただ自分は狂っているのだと確信した。

体は25年前の幸田の肌の温かさを求めているのに、一方で心は、透明なリクの言葉と自分に向けられた眼差しを必死でたくり寄せようとしている。

『忘れたら楽になるのに。そしたら、あなたの戦いは終わるよ』
過去から引きずってきたどす黒い怒りと、寂しくて何かにすがりつきたい衝動が同時に秋山の中でとぐるを巻いた。

「璃久………璃久………」

うわごとのように眩き、壁際に並べて置いてあった数点のリクの絵の前にしゃがみ込み、薄暗闇の中でその色彩を覗き込んだ。

じわじわと、潮が満ちるように不安と焦りがその色彩に飲み込まれ、麻痺してゆく。絵に口づけたあと、何かを取り込むように大きく息を吸ってみる。

そうしてゆつくりと呼吸を整えたあと、秋山は上着のポケットから携帯を取り出した。

眩しいモニターに目を細める。

時刻は午後9時をまわろうとしていた。

殺された男が珍しい名でよかった。

不謹慎にも、長谷川はそう思った。

電話番号が電話帳に載っていないくても、大体の地域が分かればあとはその地域に配布される住宅地図が無人交番に張り出されている案内図を見ればすべての名前が並んでいる。辿り着くまでにそんなに苦労はしなかった。

不幸にも全国ニュースに流された久留須道夫の自宅は、予想に反してひっそりとしていた。

まだ事件から4日しかたっていないのに、警察はおろか報道の姿も見えない。

遺体が検死から返っていないので、実家に執着することも無いのだろうか。

それとも、再び動き出した通り魔を追う事でマスコミも手一杯なのか。

頼りない街灯の下、長谷川はごく普通の民家の門扉を見ながら、先ずそんなことを思った。

携帯ラジオで、通り魔の新情報でも聞いて見ようかと思い始めた頃、玄関から中年の女性が出てきた。

人目を気にするでもなく、サンダル履きの足で近くの商店街の方向に歩いてゆく。

長谷川はそつとあとをつけ、家から200メートルほど離れた路地で、なるべく柔らかく声をかけた。

40半ばくらいの小柄なその女性は、最初こそ怪訝そうに長谷川を見たものの、亡くなった久留須の大学時代の友人の妹だということ、あっさり警戒心を解いた。

女は、マスコミも引き揚げていったし、久留須の両親も今警察に行っているので、ホッとして外出したのだと話し出した。

「私、昨年まで家政婦協会から派遣させていただいてたんですよ。久留須さんのご両親はご高齢で病気がちですから。あんな事があって、再び雇われましてね。お二人が帰ってくるまでに買い物済ませようと思ひまして。あ、道夫さんのお友達関係の方なんですよね。今はまだ告別式の日取りも決まっていないますよ、ごめんなさいね。検死がこんなに長く掛かるなんて知りませんでした。やっぱりあれですかね、入念に調べたら、犯人が分かったりするんですかね」

ぺらぺらと良く喋る女だった。いかにも口の軽そうな、うわさ話の好きそうな女だ。

けれども、コンパクトに話をまとめるのがうまい。

5分足らずでおおよそのことが分かった。

46歳の久留須は未だ独身で、年老いた両親と同居していたらしい。仕事を転々とし、結局は不動産を細々と運営して生活している両親の、すねをかじって暮らしていたという。

長谷川は不審がられないように注意しながら、一番訊きたい質問を一つだけ彼女にぶつけた。

「変なことを伺うようで申し訳ないんですが、事件のあとに、久留須さんの友人の所在を訊くような電話とか、ありませんでしたか？」
ドラマの登場人物にでもなったつもりだろうか。長谷川の質問にその家政婦はキラリと目を輝かせた。

「ああ・・・はい」

ゴシップ好きでミスターで口の軽い女は嫌いだったが、この女がそうであったことに長谷川は感謝した。

第19話 胸騒ぎ

また、夜が来る。

思うだけで心臓が軋み、脳の奥が恐怖と嫌悪で痺れてくる。

リクは結局、半分も喉を通らなかった夕食の残りを、今夜も重い気持ちで冷蔵庫に押し込んだ。

保存したところで、きつと食べることは無いだろうと思いつながら。

ちゃんと食事をしたのは、どれくらい前だろう。

飽きもせず、毎夜毎夜押し寄せる不安にも、それに慣れることのない軟弱な自分の精神にも、辟易した。

『お前さあ、金あるんだからTVとかPCとか家に置けよ。仙人じゃないんだからさ。もう引越しいないんだったら、邪魔なアイテムでもないだろ?』

一度泊まりに来た玉城がそう言ったので、何となく買ってみた小さなTVは、至る所に散らばる「闇」を紛らわしてくれるのに、ほんの少し役に立った。

けれど、空気のようにまとわりつき、特定できない次元に潜んでリクを見つめる《目》から逃れることはできなかった。

扉を開き、更に敏感になった靈感はもう、何かで紛らわすというレベルを超えた。

そんなリクが今求めるのは、今まで欲したことのないモノだった。

手を伸ばした先に、柔らかな温もりが欲しかった。

『心』という、曖昧で不確かなモノにすがりつきたいと思うようになっただけ。

自分以外の人間に救いを求めるなんて、考えたこともなかった。玉城や長谷川に出会うまでは、ちゃんと一人で立てていたというのに。

悔しいような、滑稽なような。

泣き出す一步手前で、リクは声を殺し、ひとり嗤った。

脳裏に一瞬フツと浮かんだ長谷川の声が、リクに話しかけてきた。

『あんたさ、携帯はいつもオンにしときなさいよ』

彼女の口癖だ。ああ、そうだったと思いながら、ソファの上に転がっていた携帯を手を取った。

煩わしいが、安心感を持たせてくれるそのアイテムは、玉城がリクに半ば強制的に持たせたものだ。

お節介で、いつも鬱陶しいほど強引にリクを気遣う男。

そのくせ、本当に必要とする時は、そばに居ないのだ。

もう何日、彼の声を聞いていないだろうと思いつながら、電源のボタンを強く押した。

その時、それを見計らっていたように携帯のバイブが震え出し、リクはドキリとしてモニターを確認した。

登録していない番号だったが、リクの携帯番号を知っている人間は限られている。

佐伯だろうか。

リクは通話ボタンを押した。

「はい」

「・・・・・・リク・・」

長い沈黙のあとで聞こえてきたのは、秋山の声だった。

「秋山さん？」

「ああ」

「どうしたんですか？」

「いや・・君に謝ろうと思って。昼間は君にとっても失礼なことをした」

「気にしないでください。こちらこそ、ごめんなさい。長谷川さん、

誰にでもあなんです。いい人なんだけど、口調が強くて」

「ああ、あの人ね。君をとて大事に思ってる」

「・・・そうですか？」

「うん。妬けるほどにね」

リクは話の内容とは別に、秋山の声に説明のつかない動揺がまわりついているように思えて、気になった。

「秋山さん、どうかしましたか？」

ゆつくり、また同じ質問を繰り返してみた。

そこで不意に秋山の声が途切れる。

リクはじつと携帯を耳に当て、辛抱強く待った。

電波に乗って、一人の男の波動がジリジリと伝わってくる。

そこにはさつきリクが抱いた感覚と似たものが流れていた。

言葉で説明できない不安、そして孤独。

「リク君」

ようやくそう言った秋山の声は、さつきよりもハッキリしていた。

「行つて来るよ」

「え？ 行くつて？」

秋山の意味不明な言葉にリクは戸惑った。

「決着をつける。すっかり、それで終わらせるんだ」

「秋山さん、ちゃんと説明してください」

「ごめんね、俺は狂ってんだと思う。でも、どうしようもないんだ。収まらないんだ。この仕事をやり終えなきゃ、時間が流れないんだ」

「秋山さん、今どこです？ 僕行きますから」

けれど、嗚咽するような声を一つ残して、電話は切れた。

掛け直してみたが、繋がらない。

リクは携帯を見つめたまま、困惑して立ちつくした。

第20話 動く

リクが延ばした手を、秋山は自分から断ち切ったように思えた。秋山の言動にさっきまでの自分の心細さが重なって、体中がザワザワと震え、落ち着かない。

リクは闇雲にさまよわせた視線を、再び強く握っていた携帯に落とした。

通常表示に戻ったモニターには、5件もの着信履歴が表示されている。

どれも長谷川からだ。

思うよりも先に、指が勝手に長谷川の番号への発進ボタンを押していた。

『電源切るんじゃないって言っただろうが！ バカタレ！』

いきなり電話に出た長谷川が、開口一番リクを怒鳴りつけた。

ビクリと体が跳ね上がったが、お陰で膨張して思考能力の無くなっていた頭がすっきりした。

『ねえリク。秋山から連絡とか来た？』

『・・・なんで？』

『あいつさ、きつと見つけたんだよ。25年前の誘拐犯を。二人いたんだ。やっぱり覚えてて隠してたんだ。狙ってるのは羽白って男だよ。久留須からすぐ繋がった。秋山は久留須の家を探って、羽白の所在を突き止めてる』

『久留須？』

『ほら、少し前に通り魔に殺されたって男だよ。まあ、犯人はまだ通り魔だと断定されてないんだけど。あの男が共犯者の一人だったんだ。とにかく二人いたんだ、共犯者は。久留須と羽白。ぜったい

間違いない。久留須が殺されたのを知って、《探し出せる》と思つて追いかけ始めたんだよ！」

「・・・」

通り魔？　くるす？　はじろ？

早口で説明する長谷川の勢いと、あまりにも思いがけない展開に、リクは思考がついてゆけず、しばらく言葉が出てこなかった。通り魔と昔の誘拐犯。そしていきなり25年前の犯人を追う秋山。その関係性がリクの中で咄嗟に繋がらなかったのだ。

しばらく無言で考え込んでいるリクを、長谷川は急かした。

「リク、聞いてんの？　羽白の居場所を秋山は探し出したんだよ。つい一昨日の事だ。何を意味するかわかるでしょ？　秋山は何かやらかすよ。いや、もうやらかしてるかも知れない」

「ついさっき電話があつたんだ。秋山さんから」

今度はリクが素早く答えた。

「何て？」

「今から行くんだって。この仕事をやり終えなきゃ、時間が流れないって。それだけ言つて、切れた」

「リク！」

長谷川が鋭く言った。

「そっちに行くよ。待ってて」

羽白は25年前と同じように長く間延びした顔に陰気な目をして、昨日と同じ居酒屋から出てきた。

顎にある大きな痣が確認できたが、その目印が無くとも、男が羽白

であることは疑いようも無かった。

今も付き合いのある昔の共犯者が4日前、通り魔に殺されたというのに、この男はのんきに酒を飲み、退屈な日常を繰り返している。何の価値も無い男なのだ。

秋山は物陰から風采の上がらぬ中年男を睨みながら、そう自分に言い聞かせた。

25年前に誘拐計画に巻き込んだ幸田が、警官に撃ち殺された時も、こんな風に我関せずだったのだろうか。

秋山は改めて沸々と沸き上がってきた憎悪の火を腹の底で育てながら、フラフラと商店街を歩いていく羽白を尾行した。

「こわくない。こわくない」

ジャケットのポケットに右手をつっこみ、その中でナイフを握りしめつつ、秋山はいつしか自分の中に住んでいる9歳の自分を励ましていた。

自分を優しく抱いてくれた幸田は撃ち殺され、ただ金欲しさに計画を立てた二人の男はのうのと生きていた。

自分があの時、共犯者の記憶が無い振りをしたのは、ただすべてが恐ろしかったからだ。忘れようと心を閉じていた。

だが今思えば正解だった。

例えばあの時警察に捕まったとしても、弁護され、言い訳をし、奴らは重い刑を免れる。適当にあてがわれた軽い刑罰で、許されているはずはない。

すべては今夜のためにあった。今夜、25年間育てた怒りでもって、ケリをつけるのだ。

あの時計画通り奴らが迎えに来てくれているならば、自分たちは逃げられた。

少なくとも幸田は殺されずに済んだ。優しいあの人を失わずに済ん

だ。愛情のない親の元で、再び蛇の生殺しのような生活に戻ること
も無かった。

“あの時、俺の中の希望が消えた。 天使なんか、来やしない”

駅前を離れ、羽白は一転して閑散とした古い住宅地の路地に入っ
ていった。

薄暗い街灯の頼りない明かりと、そこかしこに潜む闇が、秋山の腹
に沸き上がっていた憎悪を増長させた。

千鳥足の羽白が、だらしなく路上に唾を吐き出したのを合図に、秋
山は走り出した。

わずかに残った冷静な部分が《待て！》と叫び声を上げたが、自分
の中に飼いつけた狂気がそれを押さえつけ踏みつけ、秋山は鬼と化
した。

警戒心のまるでないその男の背後から体当たりし、アスファルトの
上に転がした所で、持っていた折り畳み式ナイフを振りかざした。
何も言うつもりはなかった。説明する価値もない。訳も分からず死
んでいけ。

羽白の恐怖に引きつった顔を暗闇の中で見下ろしながら、このあと
自分が振り下ろすはずのナイフを、夢の中に居るような気持ちで握
りなおした。

頭の中がゴム毬にでもなったように、思考にフィルターがかかった。
ああ、よかった。罪の痛みは、感じない。怖くない。これで終わる。

「秋山さん！」

ふいに、後方から声がした。

同時にチラチラ動くライトに気付き、仁王立ちしたまま秋山は、首

だけで振り返った。

がしりと何かが背中から秋山を抱き留めて来た。

足の下で、腰を抜かしたらしい羽白が、仰向けの虫のように、ジリジリと四つ足で背後に後ずさり、声も出さずに路地をヨタヨタと走り去って行く。

そのあとを余裕のスピードで、別の誰かが持つ懐中電灯の光が追っていた。

動けぬまま、秋山はただそれを見送った。

極限の緊張による忘我から引きもどされた秋山は、背後から痛いほどの力で抱き留めてきた青年に、やっとの思いで声をかけた。

「リク？」

秋山の体から腕を放したリクは、何度か呼吸し息を整えたあと、ホツとしたように笑った。

「よかった。・・・間に合った」

第21話 温もり

「どうして・・・君が」

喉が詰まってしまったのか、言葉の先が継げずに、秋山はリクを見た。

「助けてほしいって言ったでしょ。何度も、何度も」

リクは薄暗がりの中、秋山を安心させるようになるべく体を近づけ、代わりに声のトーンを落として喋った。

「俺は・・・」

「そう聞こえたんだ。だから何とかしたかった」
「・・・」

「ねえ、もう充分でしょ。今のでチャラだ。秋山さんは、さっきの男に充分罰を与えたよ。きっとあの男はすごく恐怖を味わった。それで終わらせよう？ 秋山さんだって本当はこんな事したくないんだ。怖くて仕方なかった。だから僕にいろいろ話した。違う？」

「でも、俺は・・・」

「やらなきゃいけないって、間違った思いこみを育ててきただけなんだ、秋山さんは。それだけなんだよ」

「リク・・・」

秋山はリクの目を見つめたまま、力が抜けたようにヘナヘナとその場にへたり込んだ。

「終わると思うか？ 俺は毎夜夢を見るんだ。血だらけのあの人がすがって泣く夢を見るんだ。いつだって俺は9歳のままで。いつだって俺はあの人が目を覚まし、もう一度俺を救いあげてくれるのを待ってるんだ。ずっと、ずっと、待ってばかりなんだ」

「終わるよ。もう秋山さんはすべて分かっているんだ。何も知らなかった子供じゃない。ひとりぼっちでもない」

「でも・・・俺は狂ってる」
「それなら僕だって狂ってる」

秋山は目を見開き、暗がりの中、同じ高さにしやがみ込んで話かけるリクを、じっと見つめてきた。

リクもすっかりその目を捉えて離さなかった。

秋山の目が次第に潤んで頼りなく揺れたが、その肩からはするりと力が抜け、素直な一つの人形になった。

リクがほんの少し微笑むと、秋山は顔を歪ませたまま、抱っこをせがむ子供のような仕草で、リクの方に両手を差し出してきた。

リクは近づいて、座り込んだままの秋山を正面からしっかりと抱きしめてやった。

おぼろげだが、まだ4、5歳の自分を、生前の実母はこうやって抱きしめてくれたことがあったように思う。

消えてしまいそうな微かな記憶と温もりが、リクの心の底で、確かに支えになっていると感じる。

そんな記憶さえもない秋山をリクは抱きしめた。

愛されるべき人からの虐待で心の軸がずれてしまったのなら、誰が安易にこの人を責められるだろう。

終わればいいと思った。

この人を縛って歪める何かから、開放されて欲しいと心から思った。

「さて・・・と」

しばらくそうして秋山の体を抱きしめていたリクの後方から、長谷川の不機嫌そうな声が響いた。

「いつまでくっついてんだよ二人とも！ 大の男が、きしょく悪いね！ さあ、余興はお開きだ。帰るよ、リク」

秋山から体を離れたリクがゆっくり立ち上がって長谷川のほうを向

いた。

秋山はまだ電池の切れかかった人形のように、もぞもぞとリクと長谷川を見上げている。

「さっきの人は？」

リクが遠くの暗闇に目を凝らしながら長谷川に訊いた。男の姿はもう、どこにも見えない。

「ああ、ちよつと脅して開放してやった」

「・・・何したの？」

「殴っちゃいけないよ。後ろから羽交い締めにしてさ、『25年前の悪さを誰も許しちゃいけないよ。亡霊達があんたをいつだって見張ってる。久留須のようになりたくなけりゃ、せいぜい身边に注意して暮らすんだね』・・・って言っただけだよ」

リクは、平然と言う長谷川を、啞然としてみつめた。

「残りの人生、戦々恐々なんじゃない？」

長谷川は大きな唇を引き延ばして、楽しそうに笑った。

第22話 エンドロール

「あの・・・」

ゆつくり、ふらつきながら立ち上がった秋山は、その先の言葉が見つかからない様子で、ただ困惑した顔でリクと長谷川を交互に見つめた。

まだ34歳という若さにもかかわらず、いままで背負い込んできた自分の中の狂気との戦いで、すっかりその目も肌も精彩を欠いていた。

長谷川は足元に転がっていたナイフを拾い、パタリと閉じると秋山の手にはひらに押し付けた。

「後で捨てちゃいなさい。それでこの馬鹿らしいお話はおしまい。明日からまた、真面目な実業家にもどりなさい」

ちゃんと聞いているのか、いないのか。秋山が無言でそのナイフを受け取り、少しぎこちない手つきでポケットに仕舞い込むのを見ながら、長谷川は再び口を開いた。

「ねえ秋山さん。すっかりした、心根のやさしい部下があんたのと待ってるよ。浜崎って言ったっけ。あれは、あんたがいないとダメらしい。ちゃんと自分を慕ってくれる人間に目を向けなさいよ」

「浜崎・・・」

意外なところで飛び出してきた名前に、秋山の目は戸惑ったように泳いだ。

「そしたらさ、もうリクから離れられるでしょ？ リクを忘れてやってくれるかなあ」

その言葉に今度はリクが驚いて、「長谷川さん・・・」と、小さく声を漏らした。

「でも、あの・・・リクさんの」

秋山が声を出した。

喉が渴ききつていたのか、そこで一旦唾を飲み込むと、再び懇願するように続けた。

「リクさんの絵はずっと私のお守りでした。これからも、そう思っていていいですか？」

なんともピントのずれた言葉に長谷川は苦笑し、リクも小さく笑った。

「あんたのもんだから、好きにしたらいいよ。でも、リクはやらな
いよ」

「長谷川さん！」

悪趣味な冗談に今度は少し声を荒げてリクがたしなめた。

長谷川は面白そうにニンマリと笑い、秋山もつられて照れたような、少し寂しそうな笑みを浮かべた。

長谷川とリクが乗ってきた車はすぐ近くの歩道に乗り上げるようにして止めてあった。

おなじみの大東和出版の営業車だ。

そこまで3人は歩き、車に乗り込もうとした長谷川とリクに、秋山は声をかけた。

「あの・・・」

「何？ やっぱり乗ってく？」

そう訊く長谷川に秋山は大きく首を横に振る。

そして、

「長谷川さん。やっぱり・・・天使は来ました。ちゃんと来てくれました！」

そう言つて子供のように満面の笑みを浮かべ、長谷川とリクに深々と頭を下げた。

「庶務がさあ、『また営業車使ってますか?』って嫌そうに言うんだよ。いいじゃんねえ。減るもんじゃなし。私だってさ、自分の車持ってたら自分の使うよ」

あまり筋の通ってない不満をぼやきながら、長谷川は車を発進させた。

深々と頭を下げたままの秋山をバックミラーでチラリと見たが、もう興味も無さそうに前を向き、パチリとFMラジオのスイッチを入れた。

今人気の女性アイドルグループの新曲が賑やかに流れている。

「このアイドルグループの子ってさ、何十人いるのか知らないけど、みんな同じ顔に見えるよね。前に私がそう言ったらさ、編集の松川が『長谷川さん、そりゃあ歳のせいですよ』って言いやがった。人を年寄り扱いしやがって。ねえ、リクは見分け付く?」

長谷川は、ワザと何でもない話を振ってくる。

秋山のことから頭を切り換えたいのか、それともさっきの自分の言動が気恥ずかしかったのか。

リクは助手席からチラリと、その心優しいジャンヌダルクに視線を送った。

ラジオではJ・POPが終わり、ニュース番組へ移ろうとしている。

「ありがとうね、長谷川さん」

急にシンとした車中で、リクはそれだけ言った。なんとなく、長い言葉は必要ないように思えた。

長谷川はただ前を見たまま、無表情にハンドルを握っていたが、たつぷりと時間を費やした後、

「どういたしまして」と返してくれた。

少し顔が赤いのは気のせいだろうか、

リクは初めてその横顔に、女性らしい可愛らしさを見た気がした。

『では、先程の速報の詳細です。今日午後6時過ぎに現行犯逮捕された男は、一連の通り魔事件の犯行を認めました』

クリアなアナウンスの声に、リクも長谷川もハツとしてラジオに集中した。

リクが手を伸ばし、ボリウムを少し上げる。

『今夜現行犯逮捕された垣ノ内被告は、23日の未明に起こった久留須道夫さんの殺害に関しても犯行を認めました。他の被害者のように脅すだけのつもりが、謝って刺してしまった。殺意は無かったなどと供述していると言うことです』

大まかな内容をしばらく無言で聴いた後、リクは長谷川の方を向いた。

長谷川は無表情だ。

「ああ、どうりで久留須の家の周りが閑散としてた訳だ。そっちに群がったんだね」

と、ただ独り言のように呟いただけだった。

「秋山さんがやったんじゃないかって、長谷川さん一瞬でも思わなかった？」

「あんだだって疑ってなかったくせに。だからさっき何も訊かなかったんだろ？」

「まあね」

「エンドロールだ」

「え？」

「終焉」

長谷川はリクのほうに一瞬、顔を向けた。

「天使も来たし、疑問も晴れた。映画なら大団円。ここで暗転して、エンドロールだね。B級のサスペンスコメディだけど」

長谷川はニンマリ笑った。

「うん。終わったね」

リクも笑い返した。

本当にこの人は、かっこいい人だと思った。

「寝てもいいよ」

再び始まったJ・POPを聴きながら、長谷川がポツリと言った。

「え？」

「あんた、私の車に乗ると絶対寝るでしょ。きっと寝不足なんだ。だから寝ていいよ。ちゃんと家まで送ってあげるからさ」

そうだったろうか。

リクは何だか気恥ずかしいような、子供扱いされて癪なような気持ちになりながら、少し記憶を辿った。

けれど記憶回路の働きが、やけに鈍い。

長谷川の言葉の魔法に体が反応したのだろうか。

車の中に満たされた見守られるような安堵感が、肌から脳に染みこんでくるように、心地よい眠気がリクを包み込んだ。

長谷川に返事をしたか、しないかも分からぬまま、

リクは温かな無の空間にゆっくり意識を落とし込んで行った。

最終話 闇の淵で

リクはボンヤリ自分の家の天井を見つめた。

吹き抜けのログハウス調のリビングの天井には、申し分なく柔らかな光が満ちている。

けれど自分の異常に発達した第6番目の感覚が、一瞬の安息も許さなかった。

長谷川の車を降り、礼を言っこの家に入ってくると、リクを包んだのは耳の痛くなるほどの静寂と、底知れない暗闇だった。

また長い夜が始まる。

長谷川が帰る時、一瞬呼び止めようと思ったが、踏みとどまった。

そんなことをして、どうなるはずもない。

自分の弱さが彼女を帰すことを永遠に拒むかも知れない。

何をしてくすか分からない未知数の魔物は、今も息のかかるほど近くで、リクの体も理性も呑み込もうと、

いぎたなく呼吸している。

秋口の冷え込みは、この家に帰ってきてから急に強まった気がした。ポケットの携帯を確認すると時刻はまだ11時半。

このまま朝まで起きていられるだろうか。

人間は眠らずにいたら、どれくらいで死んでしまうのだろうか。

そんなバカバカしい事を考えていると、寝不足のせいで沸き上がってくる病的な嗤いがリクを突き上げた。

「秋山さん。僕も、狂ってる」

リクは堅い木製の椅子の背に体を預けながら、目を閉じて力なく嗤った。

ふいに静寂を切り裂いて携帯が唸り声を上げた。
体を反応させたリクの手から抜け落ちた携帯が、バイブのせいで生き物のように床の上を不気味に旋回する。

ハンマーのように打ち付ける心臓をなだめながら、リクはそれを拾った。

モニターに表示されたのは、やはり登録していない知らない番号だ。まだ少し震える手で通話ボタンを押すと、リクは慎重にそれを耳にあてた。

「・・・はい」

『リク？』

いきなり耳に飛び込んできたのは、突き抜けたように明るい、懐かしい男の声だった。

「玉ちゃん・・・」

声がかすれた。

それはあまりにも思いがけなかった。

『偉い偉い。ちゃんと電源入れてたんだなリク。9割がた諦めてたんだよ。よかった。元気か？』

泉のように胸の奥底からあふれ出した感情がリクの喉を塞ぎ、言葉が出てこない。

鼻の奥がツンとなり、目頭が熱を持ち、痛みが走った。

『何だ？ 聞こえないよ。電波悪いのかな。リク？ 聞こえるか？』

「うん・・・聞こえるよ」

何度も瞬きし、視界をクリアにしてからリクは返事した。

「玉ちゃん、今どこから？」

『今なあ、チエンナイなんだ。南インド。さつき着いたばっかなんだ。数時間前まではバガンにいたんだけどさ、すごかったぞ』

「バガン？」

『ああ、ミャンマーのバガン。時差少しあるから、そっちは深夜だろ？ 悪いな。実はさ、同行してるカメラマンにこの携帯借りてるんだ。そいつ国際電話登録してるから。さっきそいつが家族にけるっていうんで、5分だけ貸してくれて取りあげたんだよ。本当はミャンマーから電話したかったんだけど、あそこって携帯通じないんだ。知ってた？ ・ ・ ・ ああ、横でカメラの奴が睨んでる。早くしろってさ。せこいんだよ、まったく』

相変わらずの玉城の様子に、じわじわと笑いが込み上げてくる。

「そう。まだそんな遠くなんだね」

『おう。バガンってさ、寺院ばっかなんだぞ、リク。今日はシュエジゴンパゴダっていう金ぴかな所見てきたんだ。ゴージャスなんだけど俺、靈感あるだろ？ なんかいっぱいゾワゾワしたもん感じて落ち着かないんだ。その後でダマヤンジーっていう幽霊寺に行くつーから『殺す気か』って却下してやったよ。こっちのお守りはリアルでシュールで効き目ありそうだぞリク。ミャンマーでは買いそびれたけど、チェンナイで何か見繕って買って帰ってやるからな』
カメラマンの目を気にしているらしい玉城は、面白いほど早口に喋った。

「もう、お守りはいいよ。この前いっぱいもらった」

声が震えないように、リクは笑って言った。

『あ、受け取ってくれたか？ 何か、数打ちや当たるかと思ってさ』

「うん、そうかもね」

『お前、元気か？』

「・・・ん？」

『あれから、大丈夫か？』

「ああ、大丈夫だよ」

『そうか。それなら良かった。あ、隣のカメラの奴が噛みつきそうな顔になってきたから切るよ。じゃあ、もうしばらくこっち回って

帰るから。またな』

「もうしばらくって、いつ？」

最後の言葉が掠れた。

そしてその問いは玉城には届かなかった。

弾丸のように一気に自分の話したいことだけ喋って、玉城の電話はぷつりと切れてしまった。

いつのまにか立ち上がっていたリクは、携帯を机の上に転がすと、壁際の布張りのソファまで歩いてその上に横になった。

いきなり花火が炸裂したように突き破られた静寂は、玉城の声が途切れた途端、さらに残酷な沈黙でリクを包み込んだ。

「もうしばらくって、いつだよ」

二人がけのソファに膝を折って仰向けに転がり、天井の一点を見つめながらリクは、ゆっくりと左腕を上には伸ばした。

天をつかむように伸ばした腕は青白く、不摂生のため前よりも細くなっていた。

少し腕を曲げ、手首に巻き付けた真っ白い包帯を右手の指で触ってみる。

そこからの痛みは気を反らさない限り、一日中リクを苛んだ。

そしてその痛みだけが今のところ、リクの正気を保つ支えになっていた。

天使は来ない。

リクの脳裏に、秋山に見せられたレンブラントの絵が鮮やかに蘇った。

白い裸体を晒した少年の顔面をつかみ、その無力な首に刀を振り下ろそうとしている老人の顔。
その顔はリクの中で悪魔に変わり、狂気に満ちた笑みを浮かべている。

その傍らに、天使はいない。

その凶行のあとに広がるのは、ただ止めどない、赤い血の海だ。

無力な羊は神に見限られ、その首を地面に転がし、ただの無意味な骸と化す。

「早く帰ってきて」

小さく口の中で呟きながら、リクは右手で左手首を撫でた。
じんわり赤い血が滲んでいる。

「そうじゃないと、もう間に合わなくなるよ」

左手を包み込むように胸に抱き、その疼きに顔をゆがめた後、リクは力なく、小さく嗤った。

(END)

最終話 闇の淵で（後書き）

『RIKU・5 天使の来ない夜』を最後まで読んでくださって、ありがとうございます。

お察しのうちに、この『RIKU・5』は、ここで完結はしません。次回、物語は更に先の見えない黒い霧の中に迷い込み、そして意外な展開を見せます。

今までの諸々の疑問を払拭する最終章。

引き続き、読んで戴ければ幸いです。

次回、『RIKU・6』を、宜しくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6118t/>

天使の来ない夜（RIKU・5）

2011年8月3日03時46分発行